

文教大学 第7回

地域連携フォーラム・シンポジウム

子ども・若者が育つ「すき間」の作り方  
～地域を〈教育〉で埋め尽くさないために～

報 告 書

主催：文教大学大学院人間科学研究科

## 目 次

シンポジウムの概要 .....	1
開会あいさつ .....	2
進め方・趣旨説明 .....	3
第1部 各地の現場から考える子ども・若者の「すき間」の作り方.....	7
(1) 子ども・若者の「遊び」と「すき間」～越谷における放課後活動の現場から～	
(2) 子ども・若者の「居場所」と「すき間」～国立市公民館の「コーヒーハウス」の現場から～	
(3) 子ども・若者の「社会参加」と「すき間」～スウェーデンのユースワークの現場から～	
第2部 トーク&ディスカッション .....	34
閉会あいさつ .....	54
参加者のみなさんからの感想 .....	55

## [シンポジウムの概要]

- ◇日 時 2020年1月11日(土) 13:30～16:30
- ◇場 所 文教大学越谷キャンパス 13号館 2階 13201教室
- ◇プログラム

### 13:30～13:40 開会

- ・ 開会あいさつ 布柴 靖枝 (文教大学大学院人間科学研究科長)
- ・ 趣旨説明 青山 鉄兵 (文教大学人間科学部)

### 13:40～14:40 第1部 各地の現場から考える子ども・若者の「すき間」の作り方

- (1) 子ども・若者の「遊び」と「すき間」～越谷における放課後活動の現場から～  
矢生 秀仁 (こども環境デザイン研究所)
- (2) 子ども・若者の「居場所」と「すき間」～国立市公民館の「コーヒーハウス」の現場から～  
井口啓太郎 (文部科学省)
- (3) 子ども・若者の「社会参加」と「すき間」～スウェーデンのユースワークの現場から～  
両角 達平 (文教大学生生活科学研究所)

### 14:50～16:20 第2部 トーク&ディスカッション

### 16:20～16:30 閉会

- ・ 閉会あいさつ 谷口 清 (文教大学人間科学部)

- ◇参加者：161名 (含：登壇者7名、学生スタッフ8名)



皆さんこんにちは。あけましておめでとうございます。今日は、新年早々、このように沢山の人に集まって頂いて、大変うれしく光栄に思っています。本日は、北は仙台から、そして南は高知からお越しくださっているということで、全国からたくさんの方が集まってくださいました。大学院人間科学研究科の主催ということですので、研究科長として私の方から、少しだけお話をさせていただきたいと思っております。



実は、このシンポジウムは昨年10月12日に開催する予定でした。ところが、みなさんの記憶もまだ新しいと思いますが、大型台風19号のために延期になりました。このときは、多くの方の命が奪われ、そして予想をはるかに超えた多くの川が氾濫し、東日本大震災以上に、大規模な緊急命令が各都道府県に出されたと言われています。最近、気候が変だと思われる方も多いと思いますが、調べて見ますと、2019年は50個の熱帯低気圧が発生して、29個の台風が発生しています。これは、皆さんもご存知通り、地球温暖化の影響と言われていて、私達の身近な課題の一つにもなっています。これからの10年、20年というのは、私達だけの生活だけでなく、地球規模レベルの多くの課題に直面していかなければならないことが予想されています。ちなみに、2030年までに地球が1.5℃高くなると、歯止めが効かないほどに地球温暖化が加速化して、地球全体の自然環境が負のスパイラルに入るという予測もあります。この動きを止めるためにもここからの10年の取組みが特に重要になります。

この10年、20年というのは他にもいろんな変革が起こると言われています。AIが出てきて、オックスフォード大学のオズボーン先生によれば47%の仕事はAIがするようになり、今の仕事の約半数は仕事なくなってしまうとか、2011年に小学校に入学した子どもが大学卒業するときには、65%は今ない仕事に就くだろう、とも言われています。2011年に入学した子は現在中学3年生になっています。その子どもたちが大学を卒業する頃には、今ない仕事に就いて、働いているという時代がやってくるということです。すぐそこまでそういう時代がきているのです。このように今まで私たちが体験したことのない課題に取り組んでいくことが求められる社会に入ったといえるでしょう。つまり、今までと同じような教育をしていたら生き延びられないということになります。私達一人ひとりの問題として、人類が初めて直面する前例のない課題にどう向き合って生き延びていく力をつけるのか、それがまさに問われています。今日のテーマは、これから起こるであろう未曾有の課題を乗り越えていく力をつけていくヒントになるようなお話になるのではないかと期待しています。参加型のシンポジウムと聞いています。皆さんも楽しく、そしてクリエイティブに、様々な課題に取り組み、乗り越えていけるヒントを得ていただければ嬉しいです。企画いただいた青山先生に感謝申し上げます。

本日の進行役を務めます青山と言います。よろしくお願いします。これからの第1部では、3人の方から話題提供をいただきます。第1部では、「すき間」というテーマをめぐって、子どもや若者に関わる素敵な実践と一緒に考えていきたいと思っています。第2部では、第1部の内容を踏まえて、私が進行役をしつつ、「すき間」について4人で気楽に「だべる」イメージで進めたいと思います。

今回は、会場みなさんと一緒にインタラクティブに進めていくための仕掛けが3つあります。

1つ目は「スグキク」という仕組みです。正面に向かって右側の壁には、みなさんのコメントがリアルタイムで投影されていきます。シンポジウム中にいつでも口が挟めるわけです。お、早速、東京都代表で来られたという方が書き込んでらっしゃいますね（笑）。

2つ目に、今回は会場内に、越谷の「Knock Coffee」さんが出店をしてくださっています。実は、オーナーの貝塚さんは、今日登壇される矢生さんとは文教大学の学生時代から一緒に地域の子どもの活動をやっていたお仲間、今は越谷でおしゃれなカフェを経営されています。とっても美味しいコーヒーなので、ぜひお買い求めください。

3つ目、今日は4時半に終了予定ですが、終了後に約1時間この会場をフリースペースとして開放します。登壇者も全員いますし、飲み物やお菓子もありますので、名刺交換がしたい方や質問したい方、ただなんとなく話したい方など、お気軽にご参加ください。

今日のテーマは「子ども・若者が育つ「すき間」の作り方～地域を〈教育〉で埋め尽くさないために～」としました。「すき間」というのは抽象的で曖昧な言い方ではありますが、実際、子どもや若者に対する教育的な活動のなかで、「すき間」がないという言い方がされることがあります。近年では、子どもの貧困の問題もありますし、子どもの体験が減っているということも言われます。また、安全が守られなければならない、ルールを整備しなければならない、マニュアルを作らなければならない、コンプライアンスを守らなければならない、評価をしなければならない、それもエビデンスが伴わなければならない、といったことがたくさんあって、それらはどれも大切なことです。地域の子どものために頑張る大人がいることも、そのための仕組みを作っていくことももちろん大切です。

しかし一方で、こうした世の中を教育的にしようとする試みが行き過ぎると、子どもや若者が自由に生きるための余地や、いろいろ試行錯誤する余地をなくしてしまうことにはならないでしょうか。たとえば、危ないからといって、子どもが危険なことを一切させてもらえないとしたら、その子は危険に対処することができなくなってしまうかもしれないし、そもそも主体的に生きるという経験自体が奪われてしまうことにもなりかねない。こうしたとき、一方で、きちんと子ども・若者を教育的に支援していく仕組みを整備しながらも、もう一方で、そうした教育的な働きかけによってなくなってしまうような「すき間」、すなわち自由さや柔軟さをいかに残しておけるのか、という問題が重要になるはずで

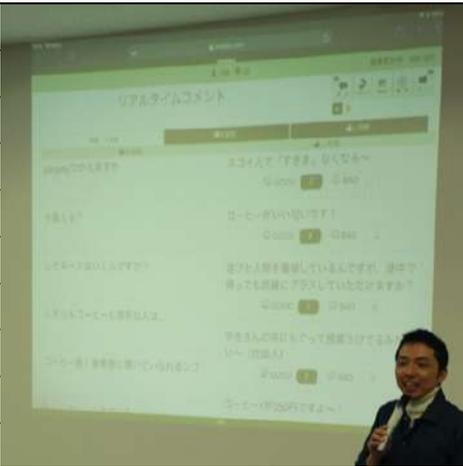


今日、最初の矢生さんには「遊び」、2番目の井口さんには「居場所」、3番目の両角さんには「社会参加」という切り口から、子ども・若者の「すき間」の問題を取り上げてもらいます。「遊び」も「居場所」も「社会参加」も、今日の登壇者に共通の領域である学校外での教育—「社会教育」といいますけれども—では馴染みのあるキーワードですが、どれも家庭や地域で子どもや若者に「与える」のはとても難しいものです。「遊びなさい」って言われて遊んだら遊びではなくなってしまうかもしれない、「子どもの居場所づくりをしましょう」って大人が頑張っつくる場所が子どもにとって本当に居場所になるのかは疑わしい、「若者がだらしない、もっと社会に参加しなさい」と言われて「はい、わかりました」と言うような若者が主体的に社会に参加できるとは思えない、といった問題があります。「遊び」や「居場所」や「参画」は、本来、大人が用意したプログラムの中ではなく、むしろそうした教育的な働きかけの外側に生まれるもののはずです。学校外教育の分野には、学習指導要領のように共通の基準はないのですが、大人が張り切って教育しようとするほど、一番大事にしたいことが失われてしまうような、そういう難しさがあります。「遊び」や「居場所」や「社会参加」が教育的に提供される時代に、本当の意味での「遊び」や「居場所」や「社会参加」のために必要な余白とか自由さとか柔軟さとかをどう残しておくか、ということをおみなさんと一緒に考えられたらと思います。

「「すき間」もわざわざ大人が作らないといけないんですか」という質問もいただきました。もちろん、大人が「すき間を作ろう」と言っつて「すき間づくり法」みたいな法律ができて、行政の補助事業みたいになっていったらきつと息苦しいですよ。ね。「すき間づくりマニュアル」とか、「すき間指導要領」みたいなものができていったら、それっつてもはや「すき間」じゃないですから。それでも、安全管理をどうするのかといった問題はずつと残るでしょうし、おそらく一つ一つの活動の中で「すき間」的な要素とそうではない要素を区別するのも難しいでしょう。さまざまな活動の中に「すき間」的な要素がきちんと含まれていることが、子どもや若者の育ちにとって意味があることなのではないかと思っつて、このような企画を立てました。これからご紹介いただく実践のなかに、どのような思っついのもとで、どのようなかたちで「すき間」が作られているのか、そのあたりを一緒に考えっつていけたらと思っつています。それでは、第一部を始めていきましょう。



〈この時間に投稿されたリアルタイムコメント〉 ※原文のまま記載しています

1	よろしくお願いします	
2	コーヒーがいい匂いです！	
3	楽しみにしております！	
4	コーヒー美味しく頂いてます！	
5	よろしくお願いします。	
6	こんなに人が来るなんて！すごい！	
7	社会文化コースを選んだ者ですが、来ました	
8	スゴイ人で「すきま」なくなる～	
9	こんにちはー！	
10	こんにちわ	
11	初めての「スグキク」にとまどっていたら、BADのところに触れてしまいました🙏すみません よろしくお願いします。	
12	コーヒー1杯 350円ですよ～！	
13	コーヒーとてもおいしいです🎵次は、お店に伺います。	
14	東京都代表で来ました！	
15	まあ、「新しい時代」については色々言われてるけど、今とは変化することは事実なんだろうな と思う ただ、「新しい時代」に備えようともその余裕が無いのが日本の社会の現状に見えるんだが	
16	前例のないシンポジウムに参加できることが楽しみです！	
17	遊びと人間を履修しているんですが、途中で帰っても成績にプラスしていただけますか？	
18	授業みたいにコメント拾ってもらえたらいいなあ	
19	はい	
20	単位落とさないで😓	
21	俺は隙間をなくしたい	
22	落単したくない	
23	今日のスグキクは真面目ですね	
24	ぼこ	
25	青鉄先生お久しぶりです	
26	学生さんの中にもぐって授業うけてるみたい～（社会人）	
27	あけおめ👍👍	
28	コーヒー飲みたい	
29	わあ 社会人の方もいらっしゃる！ やった～	
30	こんにちは	
31	コンニチワーー！！！！ー	
32	マドレーヌもとっても美味しいです！	
33	Knock Coffeeのマドレーヌ食べれますよ！	
34	ほーい	
35	マドレーヌもたびたい	

36	マドレーヌだけの販売はしておりますでしょうか？
37	あおてつの人脈の広さ
38	小生はこおひいなるものを頂きもてなす
39	スキマスイッチ
40	ナイス商売
41	セットでいくらですか？
42	コーヒー挽く音無限に聴いてられるンゴ
43	レモンもコーヒーも苦手な人は…
44	レモネードはいくらですか？
45	今買える？
46	paypayつかえますか
47	楽天パイ派です
48	Tポイントたまりますか？
49	じゃあいいですう～～
50	「すぎ間」は作るものなののでしょうか？
51	いつもの「本当に遊んでいい？」の話みたい
52	用事があるんですけど途中退出可能ですか？
53	途中退室可だそうです
54	いつもの授業のようにモヤモヤで終わるのかな。
55	正解はないけどよりよい答えを模索する感じですかね
56	ゆるーいこういう感じのしんぼじうむの方が来やすい
57	遊びつていえば香川県でゲーム利用時間制限の条例できましたよね……



## [第1部 各地の現場から考える子ども・若者の「すき間」の作り方]

### (1) 子ども・若者の「遊び」と「すき間」～越谷における放課後活動の現場から～

矢生 秀仁（こども環境デザイン研究所）

皆さんこんにちは、矢生秀仁といます。よろしく  
お願いします。子どもの目線から見た「すき間」とい  
うことで、僕からは少しお話をしたいと思います。

現在、「こども環境デザイン研究所」という屋号で、  
主に3つの事業を行っております。

1つ目は子どもたちとのワークショップの実践で  
す。造形表現ですね。例えば、みんなで、まだ見たこ  
とのない生き物を考えて描いて図鑑にしたりとか、  
夢の街とか、未来の街とかを考えて、それを表現し合  
ったりします。

想像して作るという行為はだいたい3歳以降くら  
いの年少さんから始まります。イメージして、それを表現し合うことと、「正解がない」  
ということをやっています。アイデアがそれぞれおもしろいねと思えるようなプロ  
グラムを子どもたちのなかに作れたらという思いから、出前授業という形で、幼稚園、保  
育園、小学校などで授業をしています。僕も、この文教大学出身で、教育学部の心理教育  
課程の1期生でして、同級生はみんな学校の先生になったり、幼稚園の先生になったり、  
コーヒー屋さんになったりしています(笑)。僕は、学生のときにこの仕事を始めました。  
最初に布柴先生がおっしゃったようにこれからの時代にはないものという意味では、10何  
年か前、大学4年のときにこの仕事をやろうと話をしたときには、周りは「何バカいって  
んの」という感じでした。学生を集めて、学友会というところでリヤカーを借りて、公  
園に画材を持って行って、画材を広げて、集まってきた子どもたちや、子育てサークルの  
みなさんを相手に活動を始めました。そこから縁が広がって行って、こつこつやっていく  
うちに、13年目です。現在では、だいたい全国で年間1万人くらいの子どもたち、園や学  
校で言うと50箇所くらいの子どもたちと関わらせてもらっています。

そうして、ここ5年くらいですかね、「こども環境デザイン研究所」っていう、ちょっ  
と仰々しいのですが、屋号を変えました。理由は、工作をしていて、子どもたちの反応を  
見たときに、ちょっとあれっていうことがあったんですね。一つは、保育園で、空き箱の  
工作をしていたんです。皆さんも子どものときはやったと思うんですけど、空き箱をくっ  
つけて、乗り物作るとか、ロボットつくるとか、やったんです。ある保育園で、年長クラ  
スのロボットづくりというのをやった時に、一人の男の子はティッシュ箱を使って、ロボ  
ットをつくったんですけど。「何のロボット？」と聞いたら、「ティッシュをくれるロボ  
ット」と言ったんです。まあ、ティッシュ箱ですからね。もう一人の子はとんがりコーン、  
これ、最近では知らない学生もいるかもしれませんが、とうもろこしの写真ととうもろこし  
畑の写真のパッケージお菓子ですね、指にはめて食べた人多いと思うんですけど、その箱



を使ってロボットをつくった子は「とうもろこしロボット」。そのままなんです。空き箱が変身しないんですよ。たとえば、ここからバッテリーを入れるんだよ、とかこれは本当は大きいロボットだから、ここから運転席にパイロットが乗れるんだよとか、ただの空き箱が自分のイメージで変身させることができるはずなんですけど、それが変身しない。なんでかな、と思いながら、おもちゃのリサーチを始めたんですよ。「お家でなんのおもちゃで遊んでるの?」とか「好きな遊びは何なの?」とか、幼稚園や学校で会った子どもたちに聞いていきました。

そうすると、月並みですけど、ゲームが好きという子が多い。ケータイゲームや、最近だとスマホとかタブレットがありますから、アプリゲームですね。あとはおもちゃ屋さんや100円ショップも行ってみました。行ってみると基本的におもちゃはフルカラーです。僕はドラゴンボール世代なんですけど、100円でやるガチャガチャが大好きで、僕よりちょっと上の世代はキン肉マンですか、キン消しとか、ドラゴンボールの人形とか、ああいうのって全部一色だったんですよ。さらに上の世代だと、グリコのおまけも単色です。スーパーカーが赤一色とかで、タイヤは黒になっていない。でも、単色だったから自分の想像を働かせて、自分の頭の中にあるスーパーカーをイメージして投影していたわけですよ。でも、今のおもちゃ屋さんを見たときに、全部フルカラーなんですよ。そうすると、今日のテーマの「すき間」ともつながるんですけど、おもちゃ一つとっても与えられている情報が多いんです。そうすると、最近の子どもたちが想像遊びをしなくなったっていうこと以上に、子どもが使っているおもちゃがそもそもクオリティ高くて、それは技術が発展したから素敵なことでもあるんですけど、逆に、子どもが想像するための「すき間」がないということも言えるのかな、と思います。

もう一つ、身近な例としてはですね、体の使い方ですね。4,5年くらい前に、ある校長先生と話したときに「学校の改修工事が大変なのよ」と言うわけですよ。壁にぶつかって怪我しないように壁にクッションをつけるとか、スロープをなだらかにするとか、その先生は、校長として赴任する十何年前にも、この学校に教員としていたんですけど、当時はこの校舎でそういう怪我は起きなかったそうなんです。それなのに、10年経った今では怪我が起きてしまう。何でかって言うと、体を使うのが下手になっているからだって言うんです。

さらにそれを、保育園や幼稚園で見ていくとですね、まあ子どもたちが遊んでないんです。東武線の沿線にも、駅前の高架下のところに保育園とか学童ができていますが、そういった園では、駆け回ると言うことが難しい。公園も禁止事項だらけですからね。学校でも、遊具に使っていい年齢が決まっていて、なんでかって言うと、これは安全面ですよ。安全管理は誰がしているの、責任はどうなの、となったときに、その社会の寛容さのなさとか、「すき間」のなさから子どもの行動が制限されていて、危ないからやらなくなって、結果的に体を使いこなせなくなってきているんですよ。

もう一つ、時間の使い方の変化というの、感じています。越谷市内の小学校で放課後子ども教室のコーディネーターを9年間やっていたんですけど、そのたった9年のなかで、一番感じた子どもたちの変化は何かというと、子どもたちが「暇だ」って言うようになったんですね。放課後子ども教室は1年生から4,5年生くらいまで来てたんですけど、まあ4,5年生が暇だよって来るのはわかります。放課後に公園で遊ぶ、友達の家で遊ぶ、

駄菓子屋行く、スーパー行く、その一つとして学校の体育館を使える、みたいな場所だったんですけど、そのうち、1年生が「暇だ」って言うようになったんですね。こちらからすれば、自分の放課後なのになんで暇だっていうの？好きなものあるだろ、という感じなんですけど、暇だっていう年齢が下がっている。なんでかって見てみると、なんでも幼稚園、保育園のせいにしちゃいけないんですが、幼稚園、保育園の中で、安全面ということ以外に、もう一つ、窮屈だなと思うこととして、学校との連携ということがあるんです。1年生になるための準備をする幼稚園、保育園というのが増えているんですね。読み書きは最低限できるようになるとか、自分の名前は書けるようにとか。ということは自由に遊ぶという時間の代わりにそのプログラムをしているわけです。だから、1日始まって、今日は何して遊ぼうかな、という子ども時代から、朝9時からこのプログラムがありますよ、という1日に変わっているわけですね。

そういうわけで、幼児期の子どもたちに「すき間」が少なくなっているような気がするなあと思いながら、と子どもと関わっているうちに、この背景には大人が作っている環境があるぞと思うようになりました。実践の中からそういったテーマに関わる話を集めて研修会という形で学校の先生とか幼稚園の先生とか、教育関係者の皆さんに研修するというのが2つ目のお仕事です。

3つ目は、越谷のなかに「コトリエ」という子どものアトリエをつくっています。子どもたちは、クラス制なんですけど、木曜日と金曜日に小学生と幼児が20人くらい通っていて、「自由につくる」ということをテーマにやっています。

ここからは、3つの仕事をしている中で見えてくる子どもたちの様子、そして「すき間」ということで、特に「コトリエ」のことについて、もうちょっとお話できればと思います。子どもたちのアトリエで「コトリエ」です。

このコトリエ、テーマはありません。何を作るというのは、それぞれの自由。部屋のなかで、壁は一面材料コーナーになっていまして、木工とか、画材とか、材料がいろいろと置いてあります。子どもたちは幼稚園終わりとか、学校終わりに来て、「今日は何しようかなー」って言って部屋の中を歩き回って、「あ！浮かんだ！」と言って作ったり、「今日浮かばない、だめだもう今日いい」と言って帰ったり、というような場所です。テーマがない。そして期限もないです。そしてゴールがないです。工作もお絵かきも、どこが終わりなのか、は自分で決める。期間の長い子は、最長4ヶ月かけて椅子を作っていた女の子もいましたね。1回つくって座ったら、バキッて折れて、あーって泣いて、もう一回作って、やったー！って言ってまたバキッて折れてというふうに3回作り直したら4ヶ月かかりました。

そして、褒めません。少人数でやっているのだから、大人は僕やスタッフが二人くらいいるだけなんですけど、基本的に大人たちは子どもたちを褒めません。褒めるというのは教育的にはいいような気がするのですが、なぜ褒めないかという、褒めているうちに褒められなくなるんですね。自分のなかでやったーという作品ではなく、褒めてほしいから作るようになる、という変化ですね。子どもたちを見ていると、そんな気がします。逆に言えば、褒めなくても、子どもたちはやり続けるということですね。テーマがなくて、教える人がいなくて、ゴールもなくて、そんなところに子どもたちは通い続けるのか、飽きちゃうんじゃないだろうか、というのが最初の声でした。でも、コトリエ、今5年目なのです

が、子どもたちが全然やめないんですね。だから生徒はもう入れないので、新規の入会をお断りしている状況ですが、子どもたちはみんなコトリエを使いこなしているというような様子ですね。

青山：ひでちゃん（矢生）はそこで何をしてるんです？

僕は子どもの横で自分の仕事をしています。僕は、子どもたちへのワークショップとは別に、自分の作品作りをしてまして、最近は絵本作ってるんです。

青山：今度出版されるんですよね。

そうなんです。今年の5月に偕成社から3冊絵本が出ますので、よかったら皆さん買ってください。

というわけで、コトリエでは、僕やスタッフもそれぞれ工作をしています。僕も自分の絵本を作っています。ちょっとよくないですか。こどもがものづくりしてる横で大人もものづくりをやって、それが仕事でもあるんですよ。打ち合わせしてきたこととか、子どもとも話をするんですけど、それを見て「結構いいのできたじゃん」とか感想を言いながら、彼らは大人を特別視することもなく自分の工作をやるんです。この間、4年生と5年生の女の子たちが、いまいち思うように描けないな、と悩んでたんです。そしたら、もう一人の子が、「ひでちゃんに教えてもらえば？」と言ったんです。そしたら5年生の子が、「ひでちゃんに教えてもらうことなんて何もないじゃん」って。おれ一応プロだよ（笑）。僕は全然頼られていない、という感じですね。それも含めて子どもが真剣に遊びのなかでやってる「つくること」と大人が真剣にやってる「つくること」、その遊びと仕事の境みたいなのがこの空間にはないんですね。なかなかいい空間だなと思っています。

青山：いわゆる絵画教室のような技術指導の場面はほぼ無いんですか。

そうですね、教えないですね。自分で考える、というのが大事だと思っています。

（コトリエの様子を動画で写しながら）

子どもたちの普段の雰囲気はですね、こんな感じです。みんな黙々と、という感じですね。「静かにして」とか大人から注意したりすることはありません。落ち着かない日は落ち着かないし、集中するときは集中する。極力大人がいない状態をつくりたいんです。大人として「すき間」を作ろうとしてはいるんですけど、大人がなるべくいない状態にしたい、教える人がいない状態にしたい、というのがあります。子どもたちもそれぞれ段ボールで何かを作ったりとか、「私、今日ミシンやる」って、ミシンを自分で持ってきて裁縫している子もいます。ただ、落ち着かない日もありまして、この日もワイワイ喋って、終わり。時にはゴロゴロしてたりする時もありますけど、それも含めて作る時間ですし、放課後だと思うんですよね。こちらが何か作らせなきゃと思った瞬間に、子ども主体の場というより、企画側がさせたい空間になってしまう。だからこちらからは促しません。ゴ

ロゴロしたまま1時間半過ぎて帰るときは、子どもには促しませんが、親に分かってもらうようにしています。お母さんに「ゴロゴロにだって意味があるんだと思います。なんにも意味ないかもしれないけど。でもそういう時間を大切にしたいのでよろしく願いします」、っていうふうに話をします。子どもを変えるんじゃなくて、保護者たちに理解してもらうという形で、やっております。

僕は子どもたちに自由な場を、ということで「すき間」づくりをしているんですが、自分たちの意義にしない、ということが大事かなと思ってやっています。僕たちはアトリエを作っているんだ、子どもたちの場所を作っているんだ、と思った瞬間に子どもたちに対して何か伝わってしまうような気がするんですね。だから、ここはあってもなくてもいい場所、というような気持でやっています。自分たちが子どものためにしてあげようではなく、子どもたちがやってくれとリクエストするなら、地域の大人として、じゃあ開くかという考え方でコトリエは運営しています。

〈この時間に投稿されたリアルタイムコメント〉 ※原文のまま掲載しています

58	オーバーオールがステキです！
59	それな！！でも守らなくても罰則がないなら守る人いなさそう…
60	つくってあそぼ
61	ノッポさん世代です。
62	ジェネレーションギャップやなん……
63	つくってわくわくー
64	WANIMA
65	ゴン太くんも
66	ゴロリはどこに
67	ワクワクさんてよりルイージ笑笑
68	わくわくさんユーチューバーデビューしてて驚いた
69	香川のゲーム規制。あれは行政が個人の生活まで踏み込むような法案が通っている事実、それ自体が恐ろしい
70	正解がない！ステキです！
71	出前授業っていうネーミングがいいですね
72	写真の中の子どもたちの表情がいいですね
73	後ろ寒い🇺🇸🇯🇵
74	👍
75	おもちゃのすき間の視点は面白い！
76	想像力のところで星の王子様思い出した
77	本当に大切なものは…
78	遊ぶ、というとゲームだったりしますよね
79	公園なのにボールだめなところ多いですね
80	学校で遊具に年齢制限なんであるんだ…
81	プレーパークがもっと普及してほしい

82	小さい時に走り回ってりゃ足速くなるし怪我にも自然に未然に防ぐ方法うい知っていくのにそれが最近ないと思う。運動神経が悪い人も多くなってるよね
83	小学生の子を見てみると、みんな switch を持って遊んでる気がする。
84	公園でスイッチしてる子とかよく見ます
85	そのうち皆 VR ゴーグル着けて、VR 世界の公園で遊びそう
86	子どもたちの遊びは大人がつくったルールのなかでおこなわれていて、自分で考えて楽しくする経験がないかも?!
87	シムシティ
88	大人が仕掛け人の時代かなあ、総合的な学習の時間、非認知能力
89	小泉進次郎の不倫とか木下優樹菜のはなしとか闇営業とかそんなことより確実に重要なシンポジウム
90	教育でいろんなところとの連携が必要とされてるけど、それが逆に子どもたちのすき間を奪ってしまってるのか…
91	放課後のサッカーも野球も習い事!
92	越谷宿のところか!
93	ていうか大学生も、休み時間にスマホしてる人が多いよね 自分もやっちゃう時もあるけど 暇だと怖くなるようになるのかな もはや中毒症状…?
94	そう!
95	「ほめない」!
96	ほめないってすごくない?
97	遊ぶ場所をわざわざ作らないと子どもが自由に遊べないってのは問題だと思う
98	内村航平の幼少期もパズルで想像力を養ったらしいからすごく想像力豊かになりそう
99	期限がないの良いですね
100	楽しそう! 作るので満足するから褒めなくてもいいと思った
101	評価がないから自由にやれるのかもですね
102	褒めてもらうためにやるってゆーのめっちゃわかる
103	遊びに関しては「ほめない」
104	承認欲求とは別の内発的動機付け
105	褒められたい
106	ほめられることを目的にしたら遊びじゃなくなると
107	たしかに
108	ナイスアシスト
109	ダイマ w
110	褒めて伸ばすって言うのがあるけど、それも考えものなのかあ
111	目指せキングコング西野
112	貶されるのはもちろんだけど褒められるの嫌いな子もいるんだよね
113	自分も、褒められたくはないけど暇時間はほしいな 中高暇時間なかったし
114	大人が遊んでいる場面を見ないのかも
115	褒められるのが嫌いな子もいるのか…

116	ほめないって意外でした。 でも、なるほど。
117	自分のやりたいことに没頭できる子ども時代の経験は貴重だと思います
118	こういうところ行きたかったなあ
119	大人が楽しそうにやっていることって真似する子どもも多いから、大人がまず遊んだほうがいいのかな。
120	材料と環境が整っているのが本当にすてき
121	うちのオカンも理解させてくれ
122	子どもと大人が上下関係じゃなく、対等な（友達同士のよう）空間、居場所なんですね
123	こういう環境を用意しなければならなくなっているほど、自然が周りから遠くなっているんですね。
124	「スコレ」の原義みたいでいいなあ
125	俺の母親も起業して親子に料理を教えるってやつやってるけど、子供たちを主体に、親の我慢を気が付かせるのやってるから被ってる場所あるかも！
126	親の理解を得られないと、共感してないとできないことなんだなって思ってしまう
127	親からの理解が得られるかって結構めんどくさい問題な気がする
128	極力干渉しない、場を提供するだけ、というスタンスが面白いと思った
129	自分の意義にしない！ いただきましたー
130	いまの大学生がもっと子どもと遊ぶ機会が増えないと次世代の親が変わらない。
131	コトリエは費用、月謝がかかるの？
132	美術館で働いています。館で提供しているワークショップと考え方が違って興味深いです。一方、自由さに何をしたいか困る子もいるのでは？と思いますが、それについてはどう考えますか？
133	未だに、「子は親の所有物」的な思想が強いよね まあ経済的なものは親のみだけどそれは仕方ないやん… 日本って親権強いなー



(2) 子ども・若者の「居場所」と「すき間」～国立市公民館の「コーヒーハウス」の現場から～  
井口 啓太郎（文部科学省）

井口と申します。よろしくお願ひします。私は、自己紹介しますと、文部科学省で働いていまして、ラフな格好をしておりますけど、いわゆる公務員、行政の人間です。一応、今日はネクタイをしてこない、ジャケットを着てこない、というドレスコードみたいのがあって、矢生さんみたいにキャラがたっている人の後だと、ちょっと地味ですが、よろしくお願ひします。

私は今、文部科学省で、障害者の生涯学習の政策を担当していまして、要は学校卒業後の障害者が、家庭と就労先との往復だけになってしまいがちなので、卒業した後も学べる場を作ろうということで、文部科学省が平成 29 年度から動きはじめた取り組みです。文部科学省に来る前は、国立市の公民館職員でした。今日は、主に文部科学省での仕事よりも、国立市の事例のお話をしようかなと思って準備をしてきました。公民館職員になる前はですね、皆さんの中にも取ってらっしゃる方がいると思うんですけど、大学生のときに、社会教育主事の勉強をされていて、こんな面白そうな仕事があるのかと思って、社会教育の仕事がしたいなと思ったんですよ。とはいえ社会教育の専門職として仕事に就くのはすごく難しく、最初は世田谷区の教育委員会で、非常勤の社会教育指導員という仕事をしながら、大学院生みたいなことをやって、社会教育をもっとちゃんと勉強しようとして最初の 5 年間くらいを過ごしていました。その後、たまたま国立市の職員になって、公民館で社会教育主事として、9 年ほど過ごしたという感じですね。そこで障害のある人たちの、社会教育・生涯学習の仕事に関わらせていただくことができました。そこでは、子ども・若者の取り組みにも関わってきましたので、今日は当時いた国立市の事例の話を中心にさせて頂こうかな、と思います。文科省の職員の方も来てくださっていますし、国立市の職員の方も来てくださっているので、何かあればぜひ皆さんからもフォローいただければと思っています。よろしくお願ひします。



#### 自己紹介

- 文部科学省で「障害者の生涯学習」の政策を担当し 2 年目
- 前職は国立市公民館の社会教育主事（国立市一般職・地方公務員）として 9 年間在籍
- その前は世田谷区教委（社会教育指導員）、足立区社会教育施設（指定管理者企業）、国立市役所課税課
- 社会教育の職業キャリアはトータル 20 年弱
- 20 代後半、働きながら夜間大学院で社会教育・生涯学習を専門的に学ぶ
- 学会や研究会に所属して研究活動したり、大学や専門学校で非常勤講師したり、たまにバンド活動したり…

国立市、皆さん行ったことありますか。東京の真ん中くらいにあるすごく小さな市です。人口 7 万 5 千人くらいで、面積が 8.15km<sup>2</sup>しかない、すごく小さな街ですね。

そこに、公民館が 1 館だけあるんです。この公民館はちょっと変わった公民館で、昔から結構尖ったことをしてきています。公民館の中に保育室というところがあっ

て、子どもを持つ母親が、子どもを預けて学べるようなことを 1950 年代からやっていたりとか、女性問題学習みたいなことをずっとやってきたりというところ。あるいは市民大学セミナーとあって、民主主義に根差した学習みたいなものを市民の人たちがつくってきた、そんな公民館なんですね。こんな外観でして、決して施設が素晴らしいわけではないですし、築 40 年近く経ってるので、施設的にもいろいろ改修しなきゃいけないところもあるんですけど、中身は非常に面白いことをいろいろやっているんです。

今日はそのうちの活動の一つで、公民館の中に喫茶店があるんですけど、そこで行われている活動をご紹介します。開店している日は「喫茶わいがや」という看板が出てるんですけど、公民館の中に入っていくと一階にロビーがあるんですね。公民館ってグループじゃないと使えないっていうイメージあるかもしれないんですけど、都市にある公民館なので、一人でもロビーに来たりとか、図書室に来たりとかできる施設になっていて、そのロビーの一角に喫茶店があるんです。ここは若者たちが運営しています。



### 国立市の概要

- 東京都のほぼ中央に位置する。面積は8.15km<sup>2</sup>で、全国の市では4番目、都内では、狛江市に次いで2番目に小さい。
- 市内に唯一の公民館が位置する市内北部の学園都市エリアは、東京都文教地区建築条例により文教地区に指定され、一徳大学を縦断する「大学通り」を中心に、都市景観を重視したまちづくりが進められてきた。
- 人口：約7万5千人



基本的には高校生、大学生、20代くらいの社会人が中心になって、運営しているんですけど、ここに障害のある人も一緒になって、スタッフをやっている、そんな場です。喫茶店の隣に青年室というのがあって、この部屋が若干珍しいんです。公民館って 1950 年代とかには青年が集まるようなところだったんですけど、それ以降はどちらかというと中高年

層、どちらかという女性が多い、皆さんもそんなイメージがあるかもしれません。国立の公民館にもそういう側面はあるんですけど、ここでは、若者たちの活動のスペースが確保されていてさまざまな活動の拠点になっています。ちょっと大学のサークルかなんかの部室っぽいかな。

なんでこの青年室や喫茶店ができたかっていうのを少しだけ紹介したいと思います。1950年代くらいには、青年学級振興法という法律ができて、地方から集団就職で上京してきて「金の卵」と呼ばれていた人たちが学んだりとか、仲間づくりしたりするための活動というのが地域にたくさんあったんですね。青年団とかが中心になって、1960年代までは、若者たちが公民館を使ってたくさん学んでいたんだけど、だんだんそれも集まらなくなってくる。進学率も上がって、いろいろレジャーとか消費社会というものが進展して、わざわざ公民館に行かなくてもいいじゃないか、という感じになって、だんだん若者たちが公民館に集まらなくなってくるんですね。

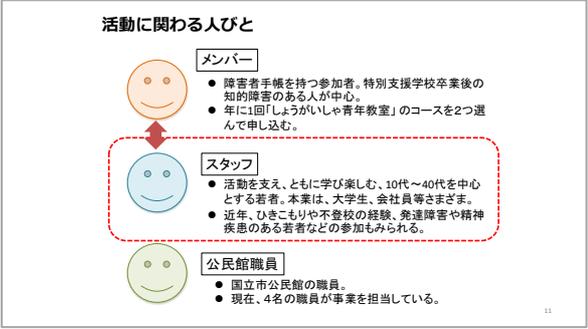
**国立市公民館の「青年室」と「喫茶わいがや」の歴史**

- 1953年：青年学級振興法
- 1955年：東京都国立市公民館開館
- 1960年：「商工青年学級」開講（「金の卵」と呼ばれた勤労青年を対象とする余暇活動）
- 1967年：「青年室」開設
- 1970年代：青年学級の停滞。「目標設定のある学習」よりも自由な「たまり場」での活動がスタートする。この活動に、障害者の青年も加わっていく。
- 1979年：国立市公民館改築
- 1980年：「しょうがいしゃ青年教室」開設
- 1981年：喫茶コーナー「わいがや」オープン

「たまり場」の実践コンセプト（→矛盾もある？）  
 公共的な空間に無意図的な場を意図的に創ることで、参加者の意図や意識がぶつかり、参加者間の差異が相互学習の源泉になる。（平林正夫）

そのときにこの公民館は、「たまり場」をつくったんですね、今日僕が与えられたキーワードに「居場所」があるんですけど、当時は「たまり場」と言っていたんです。1980年、公民館が建て替えをするタイミングで、喫茶コーナーと障害者青年教室というのが始まったんですね。「たまり場」って皆さんどんなイメージですかね。このたまり場の実践コンセプトがあとでちょっと議論のネタになるかなと思いますが、平林正夫さんというもう退職されている昔の職員の方が、「公共的な空間に無意図的な場を意図的に創ることで、参加者の意図や意識がぶつかり、参加者間の差異が相互学習の源泉になる」というねらいでつくったものです。さっきの矢生さんの話とも少し重なりますが、無意図的な場を意図的につくるって、すごい矛盾している気もするんだけど、公民館のなかにそういう場をつくったのがちょっと面白くて。例えば、コンビニの前に若者たちが溜まりだして、お店の人が迷惑したりしますけど、あれは自然発生的にできた「たまり場」ですよ。でもここでは、公民館の中にあえてそういう場をつくって、そこに障害のある人も一緒にやろう、みたいなコンセプトで始まった「たまり場」なんです。

ここに関わっている人たちには、メンバーと呼ばれる人たちとスタッフと呼ばれる人と公民館職員がいます。メンバーというのは、障害者手帳を持つ、障害のある方で、主に知的障害の人たちが多いですね。20代、30代くらいから、ずっと関わりはじめて、もうすでに40代、50代、60代くらいの人もありますけど、そんな人たちです。スタッフと呼ばれるのは、普通の若者で、高校生、大学生、社会人たちが何らかの形でここに繋がってずっと活動に関わっている、という人たちです。それから活動を支える職員が4名くらい入れ代わり立ち代わりで関わっています。



しょうがいしゃ青年教室というのは、多摩地域では各市がやっている障害者青年学級という事業で、私の今の仕事の分野ですが、特別支援学校を卒業した後の障害のある人たちに学ぶ場がない、余暇がない、ということで始まった障害のある青年のための事業なんですけど、国立市では公民館でやっていて、「しょうがいしゃ青年教室」という名前でやっています。



しょうがいしゃ青年教室

- 国立市内在住・在勤の障害者向けの余暇・文化活動。月1回平日の夜、土日を中心に活動している。
- スポーツ/クラフト/料理/喫茶実習/陶芸/リトミック/YYW（やりたいことを企画し、実行する講座）。全体で障害者約60名弱が登録する。
- 運営は公民館職員とスタッフ（学生、会社員等）により担われ、スタッフにとっても、障害のあるメンバーと関わる学びの場になっている。

スポーツとかクラフト、料理とか喫茶実習などの講座があつて、喫茶店で活動することもこの教室の学びの一つになっているというのが特徴です。毎週末にはなにかしらのイベントをやったり、講座をやっているという感じですね。昨日もスポーツ講座があつて、なんか鍋をやったみたいで、全然スポーツしてないんですけど（笑）。そんなふうにして、毎週企画があつて、集まったりする、そんな場です。さきほどの青年室を使っているという感じです。

スポーツでは、小学校のグラウンドや体育館を借りて、バスケットをしたり、ソフトボールをしたり、クラフトでは、さっきのコトリエの活動ほど本格的でないけれど、皆でなんかもものづくりをしたり、料理では、みんなで料理作ったりとか、みんなでご飯を食べるということをやっています。それから、YYW っていうのは何の活動かわからないですけど、“Yeah Yeah Wow”の略で、やりたいことやる、みんなで話し合っつてやりたいことやる、そんなことで、ケーキ食べに行くとか、そういう感じですね。

喫茶わいがや



- 市民グループ「障害をこえてともに自立する会」（会員数約120名）が運営。
- 火曜日～日曜日の12～18時で営業。10～30歳代を中心とするスタッフ約20名（学生、会社員、主婦等）がローテーションで活動。
- 「しょうがいしゃ青年教室」喫茶実習コースのメンバーが活動。
- 1日の平均売り上げは約6000円。スタッフの平均時給は300～500円程度（=わいがや）

もう一つの特徴は喫茶店です。喫茶わいがやというのが公民館の1階にあります。まさに喫茶コーナーという感じで、レトロな感じのお店なんですけど、ここは「障害をこえてともに自立する会」という市民団体が運営しています。そこに公民館が場所を貸してあげるという形で、支えているという感じですね。スタッフがローテーションで入りながら、有

償ボランティアという形でやっているの、なかなか毎日開けないんだけど、週4日くらいのイメージで、いまは開店している、という感じです。そこに障害のある人も一緒に活動して、実習というかたちで一緒に活動しています。お店の雰囲気は大体こんな感じで、結構市民の利用者の方たちがお店開けると、わーって来てくれて、てんやわんやしながら毎日やっている、という感じですね。地域のイベントなんかにも出店をしていて、市民祭りとか、ちょうど今週末、明後日くらいだと思いますが、そこに出店したり、という感じですね。「すごいクッキー」という商品があつて、これどんなクッキーか気になりますよね。誰でも作れるすごいレシピがある、ということで「すごいクッキー」らしいです（笑）。最近、市役所の1階に障害のある人が働いている喫茶店があつたり、そういうところが増

えましたけど、喫茶わいがやってそういう障害者就労の喫茶店の第一号らしいんですね。1980年に、いわゆる障害者就労のひとつの形態として、全国に普及した喫茶店の第一号ということなんです。障害のある人たちの働く場所って、いわゆる作業所って言われているようなところとか、障害者だけが集められて、なんか軽作業する、わずかな工賃で

はたらく、みたいな形になりがちです。喫茶店だと、ずっとサービスを受ける人だった障害者が、サービスをする側に回れるという良さがあるって、まさに主体になるというところにポイントがあったんじゃないかと思います。でも不得手なこともたくさんあって、計算が苦手で、レジ打ちができないことがあったりするんだけど、そういうときにはまさに支え合いながらやる、そういう実践です。それから、喫茶店に一般の人が来て、障害のある人と出会う拠点にもなる、というのもポイントで、スライドに地域の共生の「窓」になるって書きましたけど、そんな良さがあるんじゃないかと思います。

青年講座について、若者たち自身が学びたいことを企画するというのもやっています。インドのガタムっていう楽器をやる講座や、みんなで山登りやろうって行ってすごく詳しい人が中心になって企画して登る講座とか、パン作りとか、とにかくみんながやりたいことを実現する、ということもやっています。Facebookもやっているの、よかったですぜひ見てみてください。

コーヒーハウスの年間行事は、青年教室の一環でやってますけど、皆で合宿に行ったりとか、クリスマス会をしたりもしています。あとは自主サークル活動みたいなこともやって、DJ部といってCDのDJの機械のあるんですけど、それをやったりとか、そんなこともやっています。

### 「喫茶わいがや」が育んだ

- ・ 障害者が一方的な福祉サービスの受け手になるのではなく活動や学習の主体になる
- ・ それぞれが不得手なことは仲間に頼り頼られながら、障害者・健常者が共同する
- ・ 地域の共生の「窓」になる
- ・ 障害者就労の一形態として全国に普及した公共施設等の「喫茶コーナー」の第1号 ※「喫茶コーナー」は全国約900以上あるともいわれる

### 青年講座

「青年室」(コーヒーハウス)に関わる若者と公民館職員が企画する市民向け講座。

＜過去の例＞

- ・ 若者の労働問題を考える講座
- ・ インド音楽の講座
- ・ お弁当をつくる講座

これらの活動の様子は、Facebookでもご覧いただけます。「コーヒーハウス(国立市公民館青年室)」で検索してみてください。

### コーヒーハウスの年間行事

- しょうがいしゃ青年教室、喫茶わいがやに関わるスタッフ・メンバー全体の交流行事。
- 季節ごとに、お花見/宴会(BBQなど)/ソフトボール大会/ふれあいスポーツのつどい/クリスマス会/餅つき大会/合宿を開催。
- 運営はスタッフ・メンバーの中から立候補で選ばれた実行委員と公民館職員により担われ、スタッフにとっても、障害のあるメンバーと一緒に企画をつくりあげる場となっている。

### 自主サークル活動

- 「青年室」に関わるスタッフとメンバーによる自主的なサークル活動。
- コーヒーハウスのイベントやわいがやでも活躍。

＜活動の例＞

- ・ DJ部
- ・ パン部
- ・ 球戯部
- ・ ラスベリーバイククラブ(DIY班)

以上、いろいろ説明してきましたけど、それぞれの事業を区別して説明するのが難しく、**「コーヒーハウス」というのが活動の総称**ですけど、障害者青年教室と、喫茶わいがやという喫茶店と、青年講座というのが、重なりながら全体を作っているということ、それぞれが関係しあいながら、いろんな場所で、いろんな活動が行われているということな

んですね。事業としては、それぞれ別々なんだけど、先ほどの青年室とか喫茶店というところで、いろんな活動が展開されているということで、ぜひ学生の皆さんも越谷から少し遠いですが、ぜひ皆さんも、機会があれば遊びにきてみてください。現在は、文教大学から社会教育実習生として来てくれている学生さんも2名います。

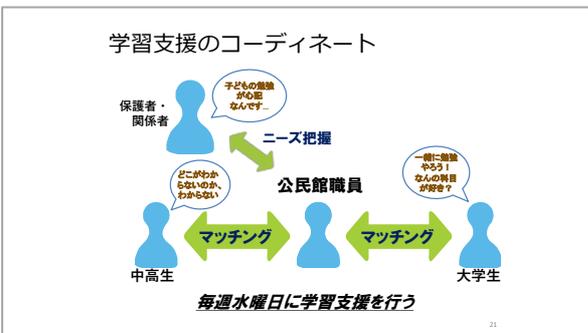
コーヒーハウスと別の活動をもう1つ紹介すると、学習支援のようなことも公民館でやっています。これは、中高生たちの学習をサポートするもので、水曜日の夜に集まって、宿題のサポートとか、テスト対策とか、そんなことをサポートしています。みんなで机を囲んで、大学生がサポートするんですね。学習習慣の定着とか、進学上の困難を少しでも軽減しようということから始まったもので、ここに来ているのは、外国にルーツのある生徒や、発達障害の子、生活困窮世帯、あるいは不登校の子どもたちとか、そういった子どもたちのまさに「すき間」になりたいという思いがあって始めた事業で、平成25年くらいからやっています。これも全国に広がっている取り組みで、生活困窮者自立支援制度を使って、貧困対策の一環としてやっている学習支援や、「地域学校協働活動」といって、地域と学校が連携して、子どもたちの学びを支える、というような取り組みも地域に広がってますけども、そんな活動の一環だと思っていただければ、と思います。基本的には中高生たちと大学生を職員がマッチングして、保護者、関係者のニーズにのっっているか、というのを個別に聞いたりしてやっています。ただ勉強しているだけだと面白くないし、学校の補完みたいになっちゃうと思うし、本当にここがみんなの居場所になるにはどうしたらいいかな、ということに当時すごく悩んで、季節ごとにお楽しみ会をやったり、皆でお弁当を食べたりとかもやっています。

このように、国立の公民館は子ども・若者の居場所になっていて、特に障害のある人たちとともに活動をする、ということが1つのポイントになっている事例なんです。

**中高生の学習支援「LABO☆くにスタ」**  
(Laboratory of studying in Kunitachi)

- 2013(H25)年度文科省公民館GPによる新規事業
- 目的①学習習慣の定着、進学上の困難の軽減
- ②「地域学校協働活動」の取り組み

→近隣大学の大学生や元教員等の協力によって実施  
→学習に何らかの困難がある子ども(外国にルーツのある生徒や発達障害・生活困窮世帯・不登校の生徒など)が参加できるように、関係者とネットワークをつくりながら運営



国立市公民館の事例から「居場所」と「すき間」というものを考えたいなと思っていて、5点ほど挙げてみました。

1つ目に、喫茶店のお話とか、お弁当食べているお話とかもしましたけど、飲食物ってすごくポイントなのかなあ、と思っていて、今日もコーヒーとかマドレーヌとか、いろいろ用意してくれてますけど、ある意味「すき間」をつくり、関係を媒介する飲食物の機能というのがあるんじゃないかなあと思っています。コミュニティカフェとか、あるいは子ども食堂というものが地域に広がっていますが、こうしたものが考えるポイントになると思っていて、国立の取り組みもそういう要素があるかなと思っているうちの一つです。

2つ目は、最初に平林さんの言葉を紹介して、無目的なたまり場、という話をしましたけど、本当に無目的なたまり場だけなのかな、というと、そうじゃないですよ。もちろん自由な場所というか、そこで何かをしなきゃいけない場でない場こそが「すき間」であり「居場所」なんだろうけど、でもそれだけだと、結局その場に関わる人って極々わずかだし、やっぱりつながりにくいと思うんですよ。だから、何か目的を持った教室とか講座っていうものが、組み合わせられているのも一つのポイントなのかなと思っています。その意味で型のある活動と無目的な「たまり場」というものが組み合わせられている事例なのかなとも思います。

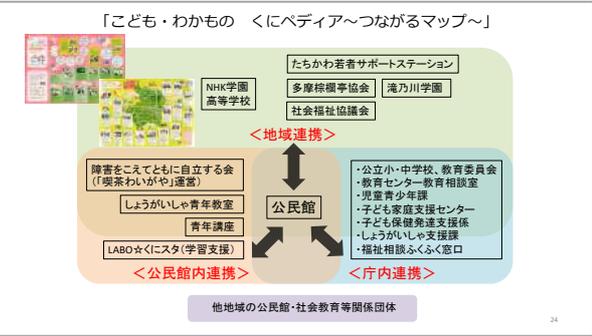
**国立市の事例で考える「居場所」と「すき間」**

- 「すき間」をつくり、関係を媒介する飲食物の機能  
→コミュニティカフェや子ども食堂の可能性
- <無目的な「たまり場」>と<型のある活動>との組み合わせ
- 障害や生きづらさなどがあり、学校や就労で「周辺」に置かれてしまう子ども・若者を支える「すき間」
- ターゲット（特定の人たち）への支援よりもユニバーサル（誰でも）な場づくりが生む「学び」
- 地域に多様な「すき間」をつくり、「見える化」する  
→国立市「こども・わかもの くにペディア」の事例

3つ目は障害や生きづらさがあるって、学校や就労で「周辺」に置かれてしまう子どもたちを支える、そんな「すき間」でもありたいなあ、と思ってこの実践には関わってきました。1つのポイントとしては、そういうしんどい人たちこそ、「すき間」を求めているかもしれないな、と思います。

4つ目はそういうターゲット的な、特定のしんどい人たちだけへの支援というよりは、いろんな人たちがごちゃ混ぜになれるような、誰もが集まれるような、そんな場づくりこそが、学びを生むんじゃないかなと思っていて、そういう学びは後でぜひ深めたいなと思っているポイントです。

5つ目は、地域に多様な「すき間」を作って、それを「見える化」ということが大事かなと思っています。この公民館の取り組みって所詮この拠点だけの話なんですよ。ここだけだと、関わる人って極々限られるし、合わない人も絶対いると思うんです。やっぱり選択肢が多様じゃないとダメだと思っていて、実際、地域にはそういう



取り組みやっている人はたくさんいるし、それを知るワークショップみたいなこともずっとやっていて、その中で、今日皆さんにお配りしている、「こども・わかもの くにペディア」を作ったんです。中を開いてもらおうと、国立市の地図と、いろんな活動が紹介されているマップなんです。これは、いろんな活動やっている市民が集まって、10回くらいワ

ークショップをやっていたら、お互いの活動を知るうちに意外とお互いのこと知らないってことに気づいて。だったら、それが見えるように、マップをつくろう、ということでこんなマップをつくりました。こんな取り組みもやっているんだけど、こうやって「見える化」していくって作業もすごく重要なんじゃないかなと思います。

青山：ありがとうございます。ちなみに、コーヒーハウスに関わるとき、公民館の職員さんは何をしてるんですか。

職員はね、活動の裏方で支える役割なんですよ。だから結構一緒になって活動していますね。

青山：メンバーの一員という感じ？

そうですね、スタッフとかメンバーにまざりながらやっていますね。

〈この時間に投稿されたリアルタイムコメント〉 ※原文のまま掲載しています

134	まさかのドレスコード
135	すき間は本体があつてのすき間だよ。本体と隙間のバランスが大事なのかな？
136	社会教育主事の資格が活かされる世の中になってほしい！
137	自由さに困ってもなんだって遊びに変えられるのが子供の頃ですよ。自由さに困っても楽しめるんですよ
138	社会教育主事が社会教育士に変わるのに主事しかとれない一年生。。
139	ここの珈琲もおいしいですよ～
140	なんかアジトっぽい、、、
141	自由さに困るっていうのは興味深いな～ その子が本当に困っていたんなら、その時は、大人が少し話しかけてあげるとかじゃないのかな…？引き出すきっかけを作るためには大人が関与するのも仕方ないかなと
142	コーヒーハウスは世界史で見た覚えがある
143	無意図的な場を意図的に作る、、、
144	公民館は地域の茶の間
145	溜まり場 ずっと行ってみたかったけど近くにないな～
146	近所の公民館はじじばばしかなくて長居しづらいから青年室すごく興味あります
147	あついです…
148	無意図を意図的に、心理学ですね。
149	横浜の、かもめっていう障害のある人達がウェイトレスとして働く喫茶店がありましたよね
150	スポーツの語源 デポルターレ
151	今の障害のある方の扱いは隔離に近いんだよ…
152	就労や活動の文脈で「障害のある人の」とか「障害のある人たち」という表現自体に意図がある、という議論もありますよね

153	ゆるいシンボいいな テストのこととか考えなくていいの気楽！！ 授業もこうだったらいいのにw
154	障害者という表記が差別を促すおそれがあるっていうのはよく聞く
155	楽しめる仕事。 公務員は稼がず、社会教育ができる。 マッチしない公務員は嫌な仕事。
156	今日の朝も NHK で外国籍の子どもたちへの支援についてやりましたね
157	文教でも外国人生徒への支援やってる
158	人間が一番油断する瞬間が食べる瞬間だって説がありますよね
159	寝てるときちゃうんか
160	「すぎ間」って言い換えるとどんな言葉になるのだろう？ 抽象度の高い便利な言葉だけど、意味や解釈が多様で難しい
161	障害って、社会が障害になっているんだって、当事者でもある教授が言ってた…
162	僕は精神疾患持ちだけど、腫れ物にさわるように接されると居心地の悪さを感じます…
163	腫れ物扱いは誰でも気まづくなるよ
164	スキマつて、管理されないということかな？非管理状態を作るための管理のあり方がテーマかな？



(3) 子ども・若者の「社会参加」と「すき間」～スウェーデンのユースワークの現場から～  
 両角 達平（文教大学生生活科学研究所）

皆さんこんにちは、両角と申します。僕は、スウェーデンという国が大好きで、スウェーデンのことが詳しいただのおじさんなので、スウェーデンの話します。僕自身の話はあまりしません。なのでこうやって皆さんと一緒に客席に座って、正面を向いてお話をしたいんですね。なので、一緒にスライドを見ましょう（笑）。



僕が簡単に自己紹介をしている間に、スウェーデンという国について知っていることをスグキクにいっぱい書いてもらっていいですか。みなさんにとって、スウェーデンといえばなんですか。おお、早い早い、たくさん書いてくれていますね。

〈スグキクに投稿された回答 (no.165-221) 〉

イブラヒモビッチ / 治安がいい / 福祉 / ニシン / シュールストレミング / 消費税高い / さむい / 北欧！ / 雪 / 福祉 / ざら らーそん / はくじん / 主権者教育!!! / 亀 / オーロラ / マリメッコ / マルメ / 社会福祉施設が多い / 自由 / シモビッチ / ミートボール / 平均身長の高さ / ノルウェーとフィンランドの間 / 障害者施設が無い / 森のムッレ教室 / イブラヒモビッチ / ボルボ / 福祉最先端の国！ / 世界一イケメンが多い国 / ロビンシモビッチ / 福祉 / 雪 / 移民が多い / ノルウェーと場所間違えがち / スウェーデンハウス / 若い人の投票率ハンパない！ / 税金が高い / 人科の研修で行くところ / 自然享受権 / 駅が綺麗 / 税金高い、その分、福祉充実 / 税金？揺りかごから墓場までの / 北米研修 / 日本より住みやすそう（多様性とか福祉で） / 説明スウェーデンは何千という沿岸の島々と内陸部の湖、さらに広大な北方林や氷河の山々で知られるスカンジナビアの国です。東部にある首都ストックホルムや、南西部の大都市であるヨーテボリやマルメはいずれも沿岸にあります。ストックホルムは 14 の島からなる水の都です。50 を超える橋や、中世から続く旧市街ガムラスタン、宮殿、野外博物館のスカンセンをはじめとする博物館や美術館があります。 / 生涯学習学概論 / 税金高い 福祉充実 / 教育 / ふりーていずひむ / ノーベルさんいるんか。調べてみたらびっくり！ / ボルボ / サープ / 民主主義を体感できる国。民主主義の教育がようちえんからあって羨ましい！ / 馬の置物(名前忘れた) / スウェーデンといえば両角 / 軍需産業 / 両角といえばスウェーデン

その間に自己紹介しますね。今は文教大学の生活科学研究所というところで、研究員をしております。他にも非常勤で大学の授業をしたりしながら、若者の社会参加を研究しています。今 31 歳なんですけど、22,3 歳のとき初めてスウェーデンに行ったら、向こうの若者たちがすごい意識高いんですよ。「民主主義」とかよく言うし、政治にも関心が高くて、みんな投票に行ってるんですよ。日本だとみんな投票なんて行かないじゃないですか（笑）。でもスウェーデンでは若者の投票率が 85% というのを見たりして、本当に違うんだなと思って、それから若者の社会参加というテーマで研究をすることにしました。要するに、スウェーデンにめっちゃ詳しい人です。ブログで、そういうのをまとめて発信していますし、論文とかよりも読みやすいので皆さんもぜひ見てみてください。

**両角達平 (モロズミ タツハイ)**  
 88年生 長野→静岡→スウェーデン→ドイツ→スウェーデン→東京  
 ・研究・通訳・ブログ・講演・NPO など  
 ブログ: Tatumaru Times : <https://tatumarutimes.com>  
 ・ストックホルム大学教育学部 修士 (国際比較教育) 卒 / 静岡県立大学国際関係学部 卒  
 所属 研究機関

所属 研究機関  
 ・聖隷大学 総合教育研究部 非常勤講師 (若者の居場所と参加！)  
 ・文芸大学 人間科学部 非常勤講師 (国際教育論)  
 ・徳和大学 国際関係学部 非常勤講師 (社会共同研究員)  
 ・徳和大学 教育学部 非常勤講師 (生活科学)

ブログのURL



社会活動

<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 中・高校生施設職員交流会</li> <li>■ TEENS</li> <li>■ シティズンシップ教育フォーラム (JCFF)</li> <li>■ NPO法人 Rights 理事</li> <li>■ Youth Policy Labs (ベルリン)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 内閣府 子ども若者育成支援点 検評委員会 構成員 (2011年)</li> <li>■ YEC (若者エンパワメント委員会) 創設・元代表・サポーター (静岡)</li> </ul>
--	--



さて、改めまして、スウェーデンとはどんな国でしょうか。

スグキクに色々出ていましたね。今日は教育とか福祉の話をしたと思っています。まず、スウェーデンは、人口が1千万人くらいしかないんですよ。東京は人口1千万超えていますよね。だけど国土は日本の1.2倍くらいあるので、めちゃくちゃ田舎です。首都はストックホルムというところで、ここではスウェーデン語が公用語として話されています。スウェーデン、北欧っていわれると、世界一幸福な国とか、そういうので有名ですよ。実際、国際的な指標においても、ランキングの上位を常に占めている感じはあります。それと、僕が紹介したいのは、意外と税金が高いけれど、ビジネスに適した国ランキングで結構上だったりとか、イノベーションとかのランキングも結構いい、あるいは政治の透明性、もちろん男女平等もそうですが、若者幸福度っていう調査もあって、これは非常に高く1位なんです。あと、ちょっと意味不明なランキングですけど、国の評判ランキングというのでも1位を取ってます。

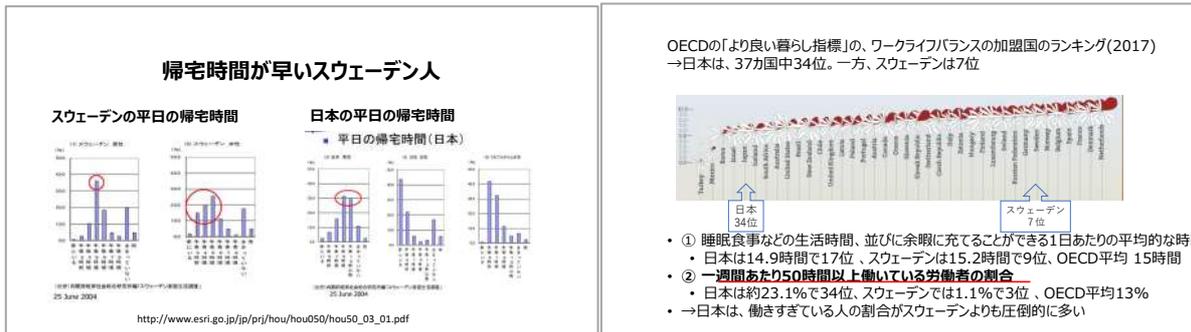
現在、気候変動問題で、世界中の若者たちが立ち上がって、いろいろ活動してますよね。グレタ・トゥーンベリが注目されていますが、彼女が生まれた国がスウェーデンです。彼女は15歳のとき、2018年の夏から登校拒否をして、議会の前に座り込んで、抗議活動を開始しました。「気候変動のための学校ストライキ」と書いたこのプレートを掲げて、一人で座ってたんですよ。そうするといろいろな人が入ってきて、世界中に広がっていったんですよ。皆さんも、ニュースや国連でのスピーチなどで彼女のことを知ったと思うんですけど、ノーベル平和賞の候補になるくらいに注目されました。彼女が登場した背景にもスウェーデン社会の面白さがあると思っています。もちろん若者の社会参加でもあるし、やはりその前提としての「すき間」がこの国にはいっぱいあるんだと思っています。

例えば、スウェーデン人って、帰宅時間がめちゃくちゃ早いんですよ、まず日本人の平均帰宅時間は、男性で夜9時以降、というふうになっています。まあ大体そうですね。専業主婦が多いので、家にいるっていうのは女性のほうが多いです。これが、スウェーデンだとどうなるかっていうと、男性だと午後5時で帰る人が一番多いんですね。なので、仕事を4時くらいに終わらないと5時には帰れないので、みんな帰るんです。女性も3時、4時で帰る人が多いっていうか感じ。まず、仕事を終えてからの時間が非常に長いということなんですね。いろんな指標でそういうことが証明されているわけですね。OECDが出しているワークライフバランスの指標でも、日本は34位ですけど、スウェーデンは7位になっています。もう一つ指標があって、こちらの方が大きな差がありますが、1週間に50時間以上働いている労働者の割合が日本は23%なんですけど、スウェーデンは1.1%



国際ランキング名	評価主体	順位	年
SDGs達成度ランキング	国連持続可能な開発ソリューション・ネットワーク(SDSN)	1位	2018
最もビジネスに適した国ランキング	米国ビジネス誌Forbes	1位	2017
革新性評価指標	欧州委員会	1位	2017
汚職認知指数	トランスパレンシー・インターナショナル	4位	2016
世界男女格差レポート	世界経済フォーラム	4位	2016
国の評判ランキング	レピュテーション・インスティテュート	1位	2016
世界若者幸福度調査	国際若者基金	1位	2017

しかいないです。つまり日本は働きすぎている人が多い一方で、スウェーデンはそうではない、ということがこれでわかると思います。



では、若者はどうなんでしょうか。スウェーデンの人口はさっき 1 千万人って言いましたけれども、13 歳から 25 歳の人口は 150 万人といわれています。そのうち、4 人に 1 人がストックホルムに住んでいます。84%がスウェーデン生まれで、残りの 16%は海外の背景を持った外国人の人です。約 7 割の若者が地域のクラブ活動などに週 1 で参加していたりだとか、ボーイスカウトとかガールスカウトとかの活動に参加している若者の割合は 23%だったり、何かしらの若者団体に活動をしている若者が非常に多いんですね。これは、フェレーニングと言われるんですけど、16 歳から 24 歳の若者の約 6 割が所属していて、年齢が上がると、約 7 割が所属している、とされているので、若い世代だけでも 63 万人が所属しているということになります。

### スウェーデンの若者とは？

- ・ 13～25歳の若者は、150万人
  - ・ 4人に1人が首都のストックホルムに住む
- ・ 84%がスウェーデン生まれ
- ・ 12歳から15歳の
  - ・ 約7割が地域のクラブ活動や協会活動に週1で参加
  - ・ 23%が、ボーイスカウト、ガールスカウト、劇活動、音楽活動、聖歌隊に参加
- ・ **少なくとも1つの若者団体（フェレーニング・協会）に属する若者の割合**
  - ・ 16～24歳で58%
  - ・ 25～29歳で70% → 若い世代だけでも63万人
- ・ その他
  - ・ 平日に少なくとも3時間ゲームをする若者：男子 26% 女子4%
  - ・ 12～18歳の半数は、教科書以外の本を少なくとも週に1度読む
  - ・ 16～18歳の55%が夏休みのバイトを経験

### 長く・多様な若者の「移行期」

スウェーデンでは、高校卒業後すぐに大学に進学する若者は**13.7%のみ** ※

世界の大学入学者の平均年齢は**22歳**  
スウェーデンは**24歳** > 日本は**18歳**

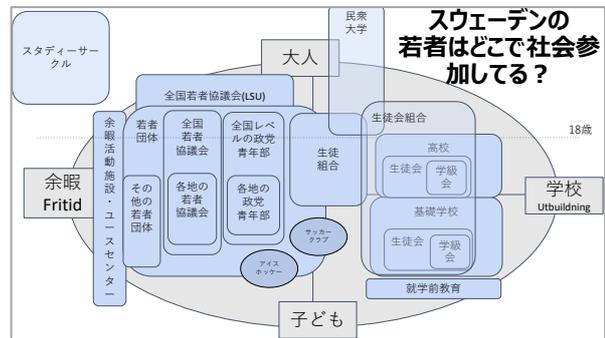
Alt! Särre pluggar vidare direkt efter gymnasiet - Nyheter (Sve) | Sveriges Radio

他にも、日本だったら高校を卒業したら、すぐに大学に行きますので日本の大学入学者の平均年齢というのは 18 歳なんですけど、スウェーデンは 24 歳なんです。高校を卒業して、すぐに大学行かないんですよ。ちなみに世界の平均年齢は 22 歳です。日本って大学に入学するのがめっちゃめっちゃ早いんですよ。スウェーデンは高校卒業して、すぐに大学に行く人は 13%しかいません。だから僕は初めてスウェーデンに留学した時に 22 歳だったんですけど、周りでは一番若かったです。大学院も 26 歳で行ったんですけど、2 番目くらいに若かったですね。じゃあ、「高校卒業してから何してるの」と聞くと、今はやりたいことがないので、アルバイトして探すといっている若者がいたりとか、高校終わったら夏休みだから、それが終わったらゆっくり旅にでかけたいとか、いま所属している若者団



体の活動を続けると言っている若者もいました。あるいは大学進学のために勉強しますとか、アルバイトします、という若者がいたりとか、高校卒業する時点ではあまり決まっていないうのが普通というくらい若者に「すき間」とかゆとりがあるわけですね。

じゃあスウェーデンの若者はどこで社会参加しているのか、どの「すき間」でどんな社会参加をしているのか、というのを作ったのが図なんですけど、右側が学校で、左側が学校外の余暇 (fritid)、英語にするとフリースタイム、というものがあります。その中に、若者団体の活動があったりとか、学校だったら生徒会とかがありますよね。国全体で生徒会を束ねている組織があったりします。



スウェーデンはスタディサークルっていう大人の生涯学習の活動も盛んなので、大人は大人でいろいろあるんですけど、今日は、若者のためのユースセンターについて、話したいと思います。

スウェーデンのユースセンターはこんな感じ (スライド) です。もともとミーティングプレイスという意味の施設で、いわゆるセツルメントとして広がっていったんですけども、基本的には学校の 13 歳から 25 歳が対象となっているので、小学校に行っている子どもたちの放課後の場所というよりは、中学校以降の若者たちが自由に行ける場所だというふうに考えてください。すべての若者が行っているかというのと、そういうわけでもなく、対象人口の約 10%弱がこういう施設に行ったりしているというデータがあります。全国に約 1500 施設というデータがありますが、完璧なデータでないのもっと多かたり少なかたりする数字もあります。このユースセンターとか余暇センターには専門の職員さんがいます。職員さんは余暇リーダーという認定資格を持っています。また、社会教育者っていう、日本の社会教育主事やドイツなどの社会教育者のように国で資格化はされてないんですけど、こういう社会教育の課程を修めた人がユースセンターで働くことが多くなっています。また、ボランティアとかインターンの人も入っています。

スウェーデンのユースワーカーがどのような感じなのかがわかる動画を見てみましょう (<https://www.youtube.com/watch?v=TmlR-FvqM4>)。スウェーデンのユースワーカーは、こういうユースセンターで働く人のことをいいます。

最後にいくつかのユースセンターの紹介をしますね\*。スウェーデンには、実は文科大学の北欧研修という授業でも学生さんが視察に行ったところなんですけど、「フリースヒューセット (Fryshuset)」っていうヨーロッパでも最大といわれるユースセンターがあります。ここは、普通のコじんまりとしたユースセンターとは違って、総合商社みたいな感じで、いろんな事業をやっているんですね。若者が自由にやりたいことをやれることはもちろん、余暇のための施設だけでなく学校も備えていたりして、一方で社会的にしんどい層の若者へのソーシャルワーク的なアプローチもしてします。就労とか起業支援もやっているんですね。青山先生とも一緒に行ったんですけど、めちゃくちゃ大きい体育館があって、スケートボードパークがあって、こういうのがほぼ無料で使えます。フリースヒューセットでは、若い時にはエネルギーがいっぱいあるから、それを自分がやりたいことをちゃんとみつけて、それにささげられるようになれば、若者たちはそのことにエネルギーを割くわけで、そうしたら犯罪とかもしなくなると考えられています。フリースヒューセットはいかつい感じの若者を集めて、そういう活動ができるようになっていきますね。

Fryshuset (フリースヒューセット)






- ✓ 1984年 YMCAの支援のもと設立
- ✓ ヨーロッパ最大のユースセンター
- ✓ 24000㎡の広大な敷地

若者がやりたいことに挑戦できる居場所

4つの事業

1. 余暇(ユースカルチャー)
2. 学校・教育プログラム
3. ソーシャルワーク
  1. EXIT (セクトにはまった若者の当事者による社会復帰支援)
  2. Lugna Gatan (デタッチドユースワーク)
4. 就労・起業支援








ウプサラという都市にある、「レオパーデン (Leoparden)」という女子の参加率が非常に高いユースセンターにも行きましたけども、ここはセンター長の女性の方がとにかくいろんな商業的ではないいろんな文化だったり、アートに触れるのが大事だという思いを持ってやっています。アンティークの家具や本も置いて、カフェみたいなスペースがあるんですね。真ん中にはアトリエがあるんですけど、これも自由に使えるようになっています。

【文化はすべてを変える】レオパーデン

- ・対象年齢：16~26歳
- ・来館者数：平均80~100人/日
- ・女子の利用率が高い
- ・商業的ではない「文化」に触れることが重要
- ・寄付してもらった古本や家具をそなえる
- ・カフェスペースをメインに、個展、アトリエなどを備える



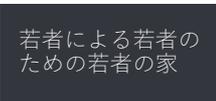


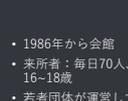


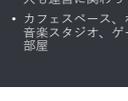
他にも「ウプサラ若者の家 (Ungdomenshus i Uppsala)」っていう名前ユースセンターがありました。ここは若者による若者のための若者の家っていうのをコンセプトにしていて、若者たちが

若者による若者のための若者の家

- ・1986年から会館
- ・来所者：毎日70人、男女比：1:1、16~18歳
- ・若者団体が運営しており、市も大人も運営に関わっていない
- ・カフェスペース、ボードパーク、音楽スタジオ、ゲーム部屋、工作部屋






\* ここで紹介されているユースセンターについては、中高生施設職員交流会 TEENS 編『スウェーデンのユースワークをたずねるたびに：スタディツアー報告書』（Kindle 版）2019を参照。



### 大人はスタディーサークルで余暇を楽しむ



- ・スタディーサークルの数：27万2000団体
- ・合計の参加者数：170万人（2015年）
- ・月2回の学習会が4カ月連続
- ・3人集まれば結成可能
- ・10種類の学習協会に登録することで施設・助成金の利用が可能
- ・政治的な結びつきもある（ABF=社会民主党系、Mtsk=緑党など）
- ・リーダーは民主的な運営の方法を学ぶガイダンスを受ける

Studiefrämjandet

### 2018年総選挙の投票率：87.18% 18~24歳の投票率は84.9%



Ålder	Röstade i % av röstberättigade	
	Höna	Könner
18-24 år	80,3	87,7
25-29 år	82,6	87,6
30-34 år	84,6	87,6
35-39 år	85,8	88,0
40-44 år	87,3	88,3
45-49 år	88,6	89,6
50-54 år	88,2	90,7
55-59 år	87,9	90,5
60-64 år	88,6	90,9
65-69 år	88,5	91,9
70-74 år	88,2	90,3
75-79 år	88,9	87,3
80-84 år	88,3	71,6
85-89 år	86,5	87,8

### 社会参加への意識も高いスウェーデンの若者



- ・政党の党员である若者（16~24歳）：5.6%
- ・市議の若者（18~24歳）の割合：5%
- ・地域の意思決定者に、「意見表明する機会がある」と感じている若者
  - ・16~19歳：21.5%
  - ・20~24歳：14.7%
- ・住んでいる地域の、自分自身に関連のある問題に影響を与えたいと思っている16-25歳の若者：45.6%

スウェーデンの若者白書の2016年版 [Ung idag 2016]

### 若者の投票率85%の秘訣？ 選挙小屋

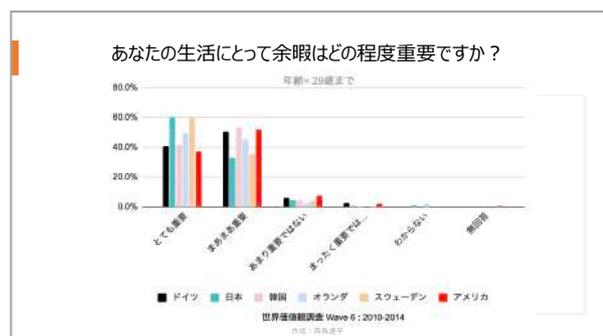
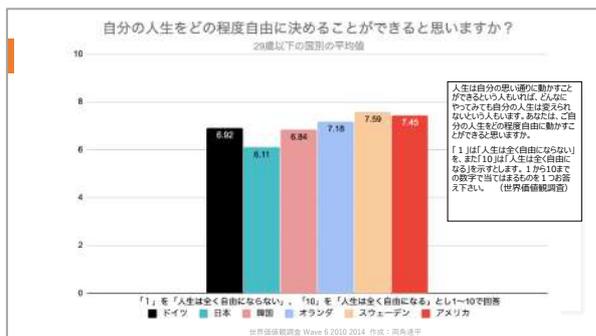
選挙小屋の前での演説

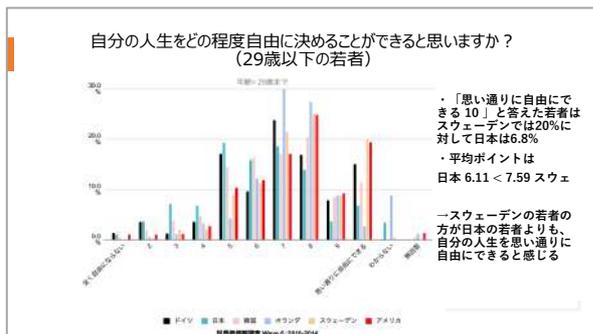


選挙小屋で宿題をする中学生



僕は社会参加って、自分で意思決定することだと思うんですね。誰かと一緒に協働してやることもあれば、政治に参加する場合もあれば、ユースセンターとかで何かやりたいことをやるっていうことも社会参加だと思うんです。スウェーデンでは、そういうプロセス経て若者が社会参加しているのかなと思います。さきほどの「ウプサラ若者の家」を運営している若者に民主主義って何ですかって聞いたたら、「自分の声を聞かせることができる影響を与えることができること」って教えてくれました。なんでこれが大事なのかって聞いたたら、「社会がずっとよくなっていくためには、変化が必要で、変化するためにはいろんな人がいろんなことを考えます。たくさんの方を考える人もいれば、ちょっとのことしか考えない人もいる、しかし、少ない人が考えるだけでは、いい社会にはなりません。多くの人考え方が反映される方が良い社会になると思います。」と言っていました。社会参加って、自分で意思決定をすることだけれど、大きくなるにあたって、他の人と社会に参加するにあたって、いろんな人と生活をしていくことになるわけですよね。そんな中で、いろんな人と声をすりあわせて、一緒に意思決定をしていくことこそが自分の影響力を高めていくこと、お互いの声を聴きあうっていうことであって、それがスウェーデンでは学校教育でも、ユースセンターでも、若者団体でも行われているんだってことを彼の発言から僕は感じ取りました。





最後にまとめます。日本人もちろん余暇を大事だと思っているんだけど、自分の人生を自由に決められると思うと感じている若者は非常に少ないことが分かりました。それがなぜかっていうと、余暇が少なく、社会参加することなしに育ってきても大丈夫な社会だったからではないか、と思うんですよね。大人も若者の声を聞かないし、若者が声をあげても何かそれが形になるわけでもないし、というのが当たり前になっていく、という感じですよね。一方でスウェーデンは、子どもや若者にとっての「すき間」が圧倒的に多いし、「すき間」があるからこそ、社会参加できるのかな、と思います。子どもや若者にとって余暇を重視するということが保証されているし、大人も余暇の価値を認めている。若者が活動できることに、十分に施設もあれば、お金も投じられている結果、社会参加しやすい環境ができるのかな、と思います。

まとめ

- ・日本人も、余暇は大事だと思っている
- ・しかし、自由に人生を自分で決められと感じていない
  - ・それは「余暇」が少なく、社会参加することなしに育ってきたからではないか
- ・スウェーデンは、子ども・若者にとっての「スキ間」が多い
  - ・子ども・若者にとっての余暇が社会で重視されているから
  - ・大人も余暇を大事にしているから
  - ・そのためのユースセンターや、若者団体に多くの資源が投じられているから
  - ・結果として、社会に参加する若者が多いのではないか

〈この時間に投稿されたリアルタイムコメント〉 ※原文のまま掲載しています

222	How are you!
223	なんかスウェーデンに生れたかった気がする 若者幸福度が高いとか羨ましいわ
224	グレッタちゃんってやらせて Twitter でみたんですけど本当ですかね？ ドイツの車両での話とか
225	やらせで義務教育まで捨てさせられるか...？
226	帰宅時間、2004年のデータですが、働き方改革が叫ばれ始めた後、2018年や2019年の状況はどうなのでしょう？
227	若者幸福度とか日本は絶対低いやん
228	「やらせ」っていうのはは流石に、妬みとかもあるんじゃないかな？と ツイッターはほんと、情報が偏りやすいからな～
229	最初のグレッタさんはきっと純粋に環境問題が関係してるんだろうけど、飛行機乗らないとかは注目集めたいだけな気がする。ジャーナリストとかがどんだけグレッタさんを追ってる事か
230	卒業してから一年間旅するのってスウェーデンだけ
231	それはオーストラリア
232	日本は働きだすと、「働く」だけになりがち...
233	高校卒業してから旅に出るとかいいな楽しそう
234	今後、週の労働時間が15時間で済むと言われているけど、今と同じだけの収入があるのだろうか？経済格差が広がらないことを願います

235	マージナルマンである時間を、大切に過ごせないとは感じる
236	将来スウェーデンに住むって決めた
237	自分も若いけど今日日本で生きててあんま幸せじゃないもん スウェーデンは自分の考えが行動で表しやすそうで羨ましいよ 将来も、日本で「働くだけ」なんて絶対に嫌だ 大学受験の時も「勉強だけ」させられてほんと嫌だったから、将来も「働くだけ」なんて生きてる意味を感じられなそう
238	自分の時間(これが隙間?)を持てると、そりゃ充実感を持ってそうだよな。
239	働き方改革
240	まあでもスウェーデンも元からこんなに環境が良かった訳じゃなくて実際に行動を起こした人がいたからこうなってるんだよね…。 とりあえずまずは選挙に行くとか具体的なことを少しずつでもやっていかないと何も変わらないままだと思う
241	自分の時間があっても、自由度が低ければ、隙間にならないような気もする
242	みんな新しいことやる勇気と努力が足んない気がする日本人
243	IR 汚職で議員が逮捕されてるような国で何を今更
244	自国民に、「何を今更」って言われちゃうくらい日本ってアレなんだな
245	新しいことやろうとしたら叩かれるからなあ。 青学の原さんとかメディアに出たりしたら、去年箱根で2位になったらすごい叩かれてたし。
246	国柄、地域性。 他国の良い面ばかりだけみても学びにはならない、 日本の社会教育環境も良いとこたくさんあるよね一(*^^*)
247	社会人ですが、文教の北欧研修行けないかな
248	スウェーデンは若者にいろいろな場とチャンス
249	商業的ではないって大切ですよな
250	人を叩くのは足を引きずって目立って成功する道をたどってる人を落とそうとしてるか、本当に道を踏み外してるのかの二択
251	有り余ってるエネルギーを発散できる機会がほしいだけなんだよね、ほんと…
252	予算はどこから？
253	出る杭は打たれる
254	日本人は何に動かされているんだろう。自分主体じゃないというか。惰性というか。
255	妬みとかね、正直分かるんだよ 新しいことをするって手間もかかるし、ぶっちゃけ怖いしね ただ、新しいことをやってる人を叩きたくはない。新しいことをする人がいなくなったら状況はいつまで経ってもそのままだから
256	すぎた杭は打たれない
257	叩く人は動く勇気がないだけ。叩くって行動自体ナンセンスすぎる。批判したいなら動けって思う。
258	出すぎるまでが大変だよなチャンスを持った人が潰れやすいのかな
259	同調圧力が日本は強い。
260	そのままをキープするのは簡単だけど成長してないってことってどこかで聞いたな。
261	しっかりしてるなあ。年下なのに。スウェーデンの政治教育ってどんな感じなんだろう？
262	若者がとにかく選挙にいつて若者の投票率を挙げれば、その上の世代がプレッシャーを受けるのでは？
263	何かを得たいならパイオニアになるべき。動いて前例を作ればいい
264	オランダの教育も興味あります
265	学びをいつまでも続ける気持ちを持たないと、楽しい生き方にならないと思う。

266	若い政治家が出てくれば若者の政治への関心も高まるのでは
267	今は高齢社会だから、どーしても若者の意見は反映されにくくなる。所謂シルバー社会
268	多分日本だと地域によって機会の格差があるのも原因だと思う。スウェーデンはさっきのプリントみる限り4分の1は首都に住んでるみたいだからそこらへんの格差が少ないのかも
269	「こうなったらいいな、こうして欲しいな」という他力の発想ではなく、「こうしたい、こう変えたい」という主体的な発想の人が増えないと変わらないのかも。
270	「～だよな」って同調圧力、ほんと苦手 確かに、自分にも多くの人の同調を得て安心したい気持ちは分かるけどさ、そうじゃない人もいるんだぞ… ちゃんと考えた時とか、「どうせ～出来ないよね」っていうのに巻き込まないでほしい
271	社会人ですが、ワクワクする仕事をしたいですね。
272	何か誰かのためにすると、あいつなりに良い人ぶってるの？とか言われるもんな。やってない人は叩いてくる。じゃあやったらって言ったら、叩いた人はやらない。
273	すき間じかん＝好きな時間
274	まなびいカフェ、自分の職や立場にとらわれず、学びを日々続けています、
275	すごい面白かった
276	いつもの授業みたいに考えることが多くて楽しかった
277	若者に場とお金を惜しみなく提供する社会が素晴らしい!日本はお金を出すと口も出される
278	青山先生と村上先生のゼミ室が身近な例ですね。教員と学生が同じ空間にいてだべったり話したりしてて
279	自我を育てる。意思決定できる時間、空間、機会をどれだけ育ちの過程で作れるか、ですかね？
280	スウェーデンは、社会が認めてると言うか国柄とか地域性が日本とは違うんだね
281	大学生にたりないこと。
282	余暇は少ないなあと思いつつ、わたしは割とその余暇を楽しんでる気がする。
283	休むこととか、自分だけの時間を持つのが「悪」みたいな考えをする人もまだまだいるからなあ。そういう人をどう理解してもらおうかということも必要なのかと思いました。
284	自分たちの力で社会はちょっとでも変えられる、とみんなに思ってもらえる取組をしたい
285	図工の時間の絵を描く時の隙間埋めろ言われたな。
286	私は休むとなぜか罪悪感を覚えてしまう
287	日本の教育は、教える人と教えられる人のしくみでなりたっていると感じる。お互いに学びあう関係になぜなれないのか？



青山：ありがとうございました。お一人お一人のお話をもっと聞きたいところもあるんですが、ひとまず第1部はこれで区切りたいと思います。自分のお友達を呼んでシンポジウムをしておいて変な言い方ですが、とても面白かったですよ？（笑）

子どもの絵画教室がたくさんある中で、技術指導もなければ、子どもを褒めることもなく、ただ大人と子どもと一緒に同じ場所で黙々と造形に取り組むアトリエの空間。公民館の中でカフェを地域の若者が障害のある青年と一緒に運営していて、となりに部屋みたいな部屋もあり、そこでいろんなイベントが発生していくたまり場。投票率が80%を超えていて、18歳で全員がセンター試験を受け、22歳で全員がリクルートスーツを着るのとは全然違う風土があって、余暇がとても大事にされている国。さらにその余暇ってというのは遊びとか居場所に関わる部分だけではなくて、実は一人一人が自分らしく生きることだったりとか、民主的な社会をつくること、つまり、ただ一人でのんびりする、という意味での「すき間」や自由の話ではなくて、その裏側で社会のあり方とか、生き方とか、そういったものとも関わるものでもありました。ちょっと話を広げすぎかもしれませんが。さきほどもスグキク上で、「すき間」を何に言い換えようかという議論がなされていましたね。きっと「すき間」とか「成長」にもいろいろな形があるはずですよ。第2部では、こういった話をみんなで一緒にだべりながら考えていきたいと思っています。



## [第2部 トーク&ディスカッション]

矢生 秀仁 (こども環境デザイン研究所)

井口啓太郎 (文部科学省)

両角 達平 (文教大学生生活科学研究所)

進行：青山 鉄兵 (文教大学人間科学部)

青山：では、後半始めていきたいと思います。第1部では、すき間が大事にされている実践を聞きました。しかし、質問が多かったのは、「どうやって作っていくの?」といったあたりが出ていたと思います。学校外の話だけでなく、学校の中でどうするのかとか、個々の実践の中でどんなことをしていけるか、といったことも考えていけるといいですね。居場所についても「そもそも作るものなのか」という論点もありますね。僕の方で選んでもよいですか?

両角：どうぞ、どうぞ。

### 「褒めない」ことの意味

青山：では、最初にひでちゃん(矢生)の「褒めない」話から始めませんか?よく「褒めることが大切だ」ってことは言われるじゃないですか。それに、うまくならないよりうまくなったほうが良いという面もあるでしょう。絵が描けないより描けたほうが良いとか、友達とうまくやれなかった子がやれるようになったほうが良いとか。そういう成長のイメージがあるじゃないですか。アトリエで絵を褒めないときに、ひでちゃんは、子どもたちの成長は期待しているの?

矢生：成長は期待していませんね。

青山：してない?

矢生：はい。そもそも、できるようになったほうが良いとは思っていない。僕の考え方にはね。楽しくてやり続けたらできるようになっちゃうかもしれないし、でもできるようにならなかったから、違うことしようというのが、ありでいいなと思っている。僕は、造形表現という形で子どもたちと関わっていますが、表現活動というのは、ある意味1つの方法だから、それをやってみてハマり続けている時にハマれば良いし。

青山：でもそれって、表現活動だからできることですか?つまり、表現活動は自由であるべきだし、指導対象とか、評価の対象であるべきではないことは分かる。でも、例えば、コミュニケーション能力だとか、自己肯定感だとかといったより普遍的な能力のようなものときには、やっぱり伸びた方がよいし、伸ばしてあげたいというような、とても教育的な感覚が僕にはあるんですが。

矢生：それも僕は、みんなが伸びればよいていうよりは、それぞれの伸び方で良い。コミュニケーション能力が100の人と、コミュニケーション能力が10の人がいたときに、10の人が100の人に追いつくより、10の人がスムーズになるようにサポー

トする人がいるなり、逆に 100 の人が 10 の人を低く見ないというか、コミュニケーション能力に関しては 100 対 10 だけど、例えば、料理に関しては、逆に 10 対 100 かもしれないから、視野を広げていく。すき間ということを考えてときに、こだわりすぎない。そういう感覚でいるから、子どもたちの造形に関しても伸ばそうということは考えていないですね。

両角：一方で、褒められて育ってきている子どもが多いじゃないですか？

矢生：多いと思います。

両角：コトリエで「先生これ作ったよー！」って子どもが来た時にはどうしますか？

矢生：そういう子はいます。たとえば 1 年生から入ってきて、「好きこそものの上手なれ」だからうまくなっていくんです。学校で賞をとれるようになってきて、賞とったっていう報告をしてくる子が出てきますけど、その場合、僕はスカします。「そうなんだ！自分的には気に入ってたの？」とか。褒められるとうれしいじゃないですか。うれしいしそれは間違っていないけど、極論ですけど、自己評価と他者評価っていうことになったときに最後は自分の満足が勝っていてほしいというか。もちろん自分の満足だけで人は関係ないってなってしまうと社会の中で生きていけないですけど、自分と他者っていうことを天秤にかけたときに 51 対 49 でもいいから 1 は自分のほうに多く乗っていてほしいと思うけど、賞っていうのは他者が決めている基準じゃないですか。そのあたりは学校の弱点というか、学校教育の弱点でもあると思います。今日も素敵な学校の先生が来てくれていますが、先生たちが成績をつける分、自分でよくできたと思っていても、先生の評価が低かったり、学校で賞が取れなかったりすると、「あ、僕の作品はだめなのか」ということになる。でも、そうなったときに「まあでも、自分的に良いか！」って思うぐらいのものさしを持ってもらえると良いかなっていう感覚ですかね。

井口：僕、矢生さんにぜひ聞いてみようと思っていたことがあって。矢生さんはコトリエの中では、先生なのですか？ということをもとに聞いてみました。つまり、今日は学校の外側でいろんな「すき間」や「居場所」があって、そこでどういう関係が作られていくのかということに私は関心があるんですけど、話を聞いて、褒めないっていう意図がよく分かったんですね。なるほどな、と。でも、例えば、子ども同士の間で「きみのこれ、超すごいな」という褒めあいとか、あるいはもしかしたら、矢生さん自身が先生とか指導者ではなくて、褒めないって決めてたのに、思わず「これすごいな」とか「素敵」みたいな感想を漏らしてしまうことってないんだろうかと。それはそれで、対等な関係性のようにも感じますが。

矢生：褒めないっていうのは、わかりやすく褒めないという風に言ったんですけど、もちろん本人が気に入っていた時に嬉しそうに「やったなー！できたなー！」って言っているのに対して「ほんとだね！」っていうこう、オーバーリアクションで褒めはしないですけど、共感するっていうのはやっぱりやりますね。たとえば、なんか表現系だと食べ物絵をかいていたら、僕って、子どもに対しては一人称が「ひでちゃん」なんですけど、「ひでちゃんもおなかすいてきたわ」と言ったり。「上手な野菜がかけたね」とは言わないんですけど、「今夜はサラダ多めにしようかな」というような、本人の世界観に共感するようにする。

青山：技術のような優劣だけのものさしとは違うところに共感するということ？

矢生：そうですね。子どもは僕を大人とみているかもしれないので、できるだけ評価者としてじゃなくて、自分が嬉しかったことの共感者ぐらいな距離感で入れればなって思っています。

井口：褒めないけど共感はある。

矢生：っていうのはありますね。本人が満足していなければ、こっちはすごい良くできたなって思う作品でも、平気で捨てて帰るとかがある。その時に「せつかくこんないいの作ったのに」とかは言わないようにしています。本人が気に入っていないんだからそれでよいなっていう風にしていきます。

青山：たとえば、スポーツだったら、上手い下手がもつとはっきり出ますよね。塾に行けばできる/できないがさらにはっきりしてしまうかもしれない。そうすると、表現活動自体が、こうした「すき間」を作りやすかったり、いまここで議論されているような「褒める」と「褒めない」の間のグレーゾーンを許容しやすいコンテンツなのかもしれないですね。

あと、さっきの10と100のコミュニケーションの人の話で、10の人が11になることに意味はないのか、ということも考えます。一斉に日本の子どもたちが50になりましょうというのは息苦しいし、社会に要因があるのに、個々の「生きづらさ」を個人の成長によって解決しようとするのもとても苦しいと思う。でも、コトリエの中でも、結果的に「教育」とか「学習」に近いことはたくさん起きていると思うんだけど、そのあたり、どうでしょう？

矢生：最初の僕の説明の仕方が極端に教えないと言いましたが、それは大人主体で教えないということであって、例えば、うちのアトリエに来ている5歳の子が、木工をやったり、のこぎりも使うし、金槌も使っているいろいろ作るんですけど、それは本人が使ってみたいっていうことがあって、道具箱から金槌を出してくる。それで、ちょっと危なそうだなと思ったときには使い方を教えています。



## 「自由であること」「自分で決めること」をどう支えるか

青山：この辺って、大人のかかわり方っていう話で、今ここにいる人たちも関心があるところだと思うんですけど、例えば、スウェーデンのユースワーカーがどんなことを大事にしているのかとか、公民館の職員がどんなことを大事にしているのかって少し話してもらえますか。

両角：スウェーデンだと、学校で1番教えようとしているのは生徒の社会への影響力を高めること。社会へもそうだし、自分への影響力もそうです。それは、自己決定すること。もちろん、基礎科目があったりするわけですけど、基本的には民主主義を前提にした上で、自分で決めるんです。だから、学校では意見を求めるんです。「あなたはどうしたいか」っていうのが基本。それを小さいころからやっている。したがって、ある学校ではテーマ学習で何の科目をどのような方法で、だれといつ勉強するかを自分で決めて、自分の評価を自分で行う。教育の中でも、とにかく自己決定を促すっていうことをやっているとよく聞きます。ユースセンターとか学校外の社会教育になってくるとさらにその傾向が強い。オープンレジャーアクティビティっていう方法があって、いわゆる若者発の活動を始めましょうということが大事にされています。ユースセンターに行くとき基本的にはいろんな活動がある。日本では活動が用意されていて、そこに参加するというイメージですね。スウェーデンでもそのようなことがあります。主に若者がやりたいことを何かっていうのを引き出して、それから始める。なぜかという、自分で決めて自分でやるのが基本的であると考えられているから。日本の公民館でもそのような感じで行われているのではないのでしょうか。

井口：そうですね。公民館とか社会教育って、まさにそうした主体形成の支援を目指してきたはずですよ。スグキクで社会教育主事について話がでていたので少しかわるかなって思いますが、ユースワークの中でも意識されていることだとは思いますが、お互いを尊重しあうようなそういう声掛けや言葉かけっていうのは、学びの支援の一つの方法ですよ。何かできるようになるとか、あるいは変わるとかって、もちろん素敵なことだし、それ自体は何かしら支えたいと思いますけど、評価するっていう意味では、社会教育の学びの成果を証明するとか、権威付けするということはすぐわかないですよ。何かの能力とか何かの技術とかに対する評価っていうのは、やっぱり馴染まないです。それってなんですかね。

矢生：僕さっき、達平さん(両角)の話で、ちょっと違和感を感じたことがあって、自己決定がたくさん入っているというスウェーデンの話をしてたじゃないですか。高校卒業して何をしようか、好きなことを見つけたいから、大学に行く前に、ちょっとマツタリするということは、素敵だなんて思うんですけど、あんまり日本と変わらないんだなって気がして。そうになっているけど、大学に行くっていうのが日本で、大学に行く前にマツタリする時間があるのはスウェーデンなのかなって思ったんですけど。ただ、僕がもう少し小さい子どもたちを見たときに、例えば、3歳4歳5歳の子もそうなんですけど、自分の興味があることとか、好きなことを見つけるっていうのはうまいんですよ。人間は、そういう自分の好きなことや興味あること

への判断ができているというところから始まっているのではないかと思う。今、うちの子どもが1歳なんですけど、その子も暇知らずというか、永遠に自分が面白いと思うことを見つけているので。そうすると、それらを見つけていた高校を卒業していった子たちが「好きなことがまだわからないので」というコメントになるのか。もしくは「やりたいことがあり過ぎて、どこから手を付けてよいかわからないんだよね」という若者になっていくというイメージがあったので、そこがぴんと来なかった。戸惑っていることまでは一緒なのだとしたら、またそこにもすき間や手掛かりがあるのかなって思って聞いてたんですけど。

青山：スウェーデンの若者は自由で主体的に生きてるイメージがある一方で、やっぱり18歳の子は何をして良いのか分からない子がいっぱいいるっていう状況が不思議だということですね。たしかに、さっき18歳で大学に行かない理由として、やりたいことがいっぱいあるから大学にいかないのではなくて、やりたいことが見つからないから、という話がありました。

両角：まず、大学の学費がかからない。日本だったら高校2年生の時に進路決定をしないとけないし、学費がかかるという経済的な制約もあるので、大学進学しなければいけない。大学を卒業したら、企業に勤めるルートが存在する。スウェーデンの場合は、経済的な制約がないので、それを考えないで何がしたいのか考えられる。キャリアと遊びのやりたいことも重なるところとずれるところがある。スウェーデンの場合だったら、仕事をしながら遊べると思うんですよ。だから、両方できるし。例えば、ユースセンターは、プロのバスケットボール選手を輩出しているんですよ。そういう風に、自分のやりたいことをとことん追及し続けて、そっちへ行く人もいます。いろんなオプションや選択肢があって、変な年齢主義だったりとかそういうものは少なく、いろんな若者の生き方があるよっていう話がしたかったです。

青山：スウェーデンの話やひで(矢生)の話って、自由とか自己決定についての話だと思うんですけど、さっきスグキクのコメントにもあったように、自由って辛いときあるじゃないですか。特に、日本の大学生とかだと、自由が上手な人ばかりじゃないですよ。何してもいいよっていうと、戸惑ったりするっていう。結局、自由にできるだけの経験や環境がなければ自由ってしんどいっていうところがあったり、今もスグキクのコメントにでていましたけど、自由の裏返しで自己責任が強調されるようになったときに、「大学行かなかったのはあなたでしょ!」「勉強しなかったのはあなたでしょ!」となってしまう危険性もある。「すき間」とか自由があることによってしんどくなったり、あるいはかえって自己責任や格差につながってしまうリスクについてはどう考えますか？

両角：日本でいう「あなたの責任だからね」っていうことを押し付けられたときに、その時に与えられたオプション、選択肢の種類というのが、日本には非常に少ないっていうことがある。学費の件もそうですけど、人生の前半期の社会保障をきちんとするっていうのがやはり少ないと思ってしまう。それこそ、スウェーデンでは驚くべきことに、高校生は国から月1万円ほど支給されている。大学生になると、給付型の奨学金がなぜか月4万円もらえる。



青山：全員に？

両角：そうなんです。それで学費がかからない。あと、例えば若者団体に何か活動したいと思ったときに、日本では場所がないし、お金もない。助成金を取れそうなものもあるんだけど、自分たちのテーマ的に取れなかったりするんですよね。リソースというか選択肢がいっぱい与えられて、みんな平等なスタートならわかる。だったら、自己責任というのも分かる。だけど、そうじゃないってスウェーデンに行ってみて思いました。なるほど、ここまで自由であることのスタートラインが違うんだなって思いました。

青山：社会的な補償がちゃんとある上での自由だからこそ、自由に生きるもののリスクもある程度軽減されるっていう面もありそうですね。確かに、今の日本で「じゃあ俺、しばらく旅に出るわ」っていうと、就職で不利になるとかいろいろリスクがあると思うんですけど、リスクが大きい割にそれを個人の責任でやらざるをえないところが大きい。今ある「すき間」が小さいわけだからね。ひで(矢生)はどうですか？コトリエの自由がしんどい子どもっていないですか？あるいは、「学校が自発性を奪っている」というスグキクのコメントがあったんですけど、学年が上がっていくにつれて、だんだんと自由に過ごすのが下手になったり、やりたいこと探しができなくなっていくようなことってありますか。

矢生：僕の個人的な感想として、子どもたちは来て困る子もいる。戸惑う子も。ただ、リハビリ期間というのも少しあって、しばらく物を壊してみたりとかするんですけど、しばらくしていくうちに、また自分が作りたいものが出てくるっていう様子は見たことがある。毎月コトリエに来ている子ではないんですけど、造形で入っていた幼稚園生の子でも1年半何もせずに困っていた子がいるんですけど、その子は1年半と1か月後に自分からやるようになって、卒園するときには「最初は嫌だったんだけど、楽しくなってきたんだよ」っていうのを、6歳にして自分で説明するくらい変化があったんですよ。

井口：それは何がきっかけだったのですか？

矢生：何だったんでしょうね。1つは、安心というか。表現でいうと、上手い下手を気にしている子とか、周りと違うことを気にしている子は、作業をやらないということ

が多い。それをほぐすには、僕の格好もそうなんですけど、ラフな格好で行くとか、自己紹介の時にいきなり工作をする前に質問をする。例えば、好きな食べ物は？と聞くと、果物縛りになるクラスがあったりする。「あ、これは同調するのが強いんだな」と思い、果物の質問じゃない、主食だったら何？おかずだったら何？とか。自分が出すアイデアに対して、どんなアイデアでもありですよっていうほぐしをやってから工作をするようにしています。それが10分で済む子もいれば、1年半くらいかかる子もいて、その間は、工作をやらないでニコニコしてて、隣で積み木したり、絵本を読んだりしているんですけど、そういう子にも「おはよう」とか「今日はそういう作るんだね」って言うだけで、そのまま「じゃあね」って帰るっていう感じでやってますね。

僕自身のことですと、学生の時にこの仕事を始めているんで、なかなか上手くいかないんじゃないってことがあったのですが、10何年生き延びれている理由は、自由だし、僕自身やりたいことをやっているし。でも、今の社会はどのような動きがあって、どういうところに価値が見いだされていることは整理していた。そのうえでこういうプログラムは、僕の伝え方とプログラムの内容が良かったら伝わるのか。それとも、プログラム自体が今の社会に合わないことなのかを客観的に見る期間をとって、それで通用しそうだったらこの仕事を続けて、自分の今の力ではなかなか変化させられないなと思ったら、違う仕事をまた考えるなり、やろうかなと思ってた。ぼくの考えは、社会ではあまり寛容ではなかったため、マイナスだったかというところと違う。その仕事を励ましてくれる家族や友人がいた。

青山：ひで(矢生)は、それが個人の力でできる人だったんだと思うんですよ。でも、そうではない人もいるわけだから、それを社会がサポートすることにはやはり意味があると思う。もちろん大人がサポートしすぎたら良くないですけど、自分でそういう判断ができて、ニーズに合わせてながら自由に生きられる力のある人以外もそういうチャレンジができた方が良くないかな。

矢生：僕はどっちもあって良いよねっていうスタンスです。僕はそっち側の話をしますが、どっちもあって良いよねということが根っこにある。

青山：なるほど。

### 「悪いこと」とどう向き合うか

参加者：コトリエでは子ども同士で喧嘩はしないのですか？

矢生：子ども同士で喧嘩ですか？喧嘩はないですね。あんまり見ないですね。

青山：スウェーデンとかはどうですか？喧嘩とか。仲良くしようよ！みたいなことってありますか？「すき間」においては、喧嘩も許容されたらいい部分があるし、昔であれば体育館の裏でタバコが吸えたりすることだったり、そこに先生が寄ってきて「おい、何やってんだ」じゃなくて、「俺にも火くれよ」って言ってたりしたことによって生まれていた「すき間」があったりするわけですよ。でも今は、そういったかつてはある程度許容されていた「ちょっと悪いこと」も許容されなくなっているし、仲良くしましよとか悪いこととしてはいけませんというプレッシャーも強くな

っているように思います。もちろん、差別のように、許容されるべきでないこともある中で、こうしたことをどう扱うかは「すき間」と非常に関連する気がするんですが、どうですか？

井口：そうですね。僕がかかわってきた国立市公民館の「喫茶わいがや」とかコーヒーハウスって、知的障害や発達障害がある人たちがいるわけですね。その人たちは、自分の思っていることを伝えることが苦手だったり、話し合いのキャッチボールがうまくできなかつたりします。その中でみんなで議論してものごとを決めていくので、行き違いとか、時には喧嘩とか、上手くいかないことがたびたび起きる。一人一人が何かをやるよりは、みんなで何かをしていこう、共同で作業しようっていうことが多いので、むしろそうした葛藤や対立というものを乗り越えていくプロセスを大事にしたいと思っています。誰かがなだめたり、そんな風に悩んでいるんだねっていうことを、後で知るとか。継続的な活動の中で、お互いのことを理解するとか。あるいは、合わないと思って距離を置くとか、関係性が組み替っていく。組み替えていくことは、今日話した概要だけでは出てこないプロセスとしてあります。むしろそれがすごく大事だったりします。

青山：例えば、その中に法に触れる人がいたり、障害にかかわる差別や排除があつたりするわけですね。スウェーデンでいえば、移民の問題がある中で、ユースワークの中で、ヘイト的な言動などの、許容できないラインをどう引くかという話があると思います。昔だったら、学校や施設の中で起きた問題を警察に言うか言わないかというような問題もあつたかもしれない。その辺はどうですか？むしろ、自由であることの負の側面ともいえるかもしれない。

両角：スウェーデンのユースワークの現場は大変ですよ。僕もいくつかのユースセンターでインターンをしていたんですけど、郊外のユースセンターとかに行くと、そもそも白人のスウェーデン人はほとんどいないんですよ。青山先生とも一緒に行きましたけど、スウェーデンで犯罪の半数以上がこの地域で起きているというようなところに行った。アフリカ系や中東系の人が多くいる移民街があつて、そこにあるユースセンターに行ったんですけども、その地域は車がよく燃えるんですよ（笑）。毎年、夏になると、最も危険度が高まる週末があつて、その時には、アルコールを含まないクラブパーティーという企画がある。夏休みが始まる最初の一週間の週末は最も車が燃えたり、暴動などが起きることが多いんです。北欧って結構幸せなイメージがあるので、安全なイメージがありますが、地域によっては全然そんなことがなくて、僕がいたところもそうでしたし、インターンをしているときにその現場を見たりとか、マリファナの匂いがするとか、ユースセンターの中では結構起こつていたりする。そういうのが日常です。

でも、それがユースセンター  
なんだなって思いました。そう  
いう人たちがいられる場所と  
しても存在しているし、彼らも  
たまり場や居場所を求めている  
わけです。スウェーデンのフ  
リースヒューセット (Fryshuset)  
(最も大きいユースセンター)  
が始まったときも、スキンヘッド



でも怖がられていた若者たちに、フリースヒューセット (Fryshuset) の創始者 Anders Carlberg は彼らにここに来ていいよって伝えるわけです。結局、スウェーデンのユースワークはセツルメントから始まりましたけど、いろんな若者も集まってくるんですよ。若者にとって、たまり場や居場所を求めることは本質的なものであるから、いろいろなことが起きたときに、微妙なグレーゾーンを行き来するような部分っていうのも、ユースワークが担うことなのかもしれないですね。今の文脈は、どっちかっていうと移民の若者の社会的包摂の文脈ですけれども、結果的に非行の防止につながることも「すき間」であり、グレーゾーンであるところが関わらざるをえない場所であると思います。

井口：まさにそれは、無意図的な場を意図的に公共施設に作るという発想ですよ。そこでの問題は、その場ができて、様々なトラブルが起きるとか、あるいはヘイトがあるとかしたときに、そこにユースワークがどう介入するのか。あるいはその場で包摂するって言ったときに、雑多なものが入ってきて、その場が維持しにくくなったり、だれかを排除するっていうことが起きた時にどうやってグループや場を支えていくのか。これらのことが今日の話の中での重要なポイントになる気がしました。そこはどうなんですか。

両角：フリースヒューセット (Fryshuset) の話だと、悪ガキがいっぱい集まってくるので、そこで職員と喧嘩したりとかいうことや、そこに行って若者が何かしたとかで炎上を起こすわけです。それでメディアなどに叩かれるんだけど、でも、彼らは若者にはどうしてもこういう場所が必要だと言ってとにかく戦ってその場を守り抜いたんですよ。なので、そういう局面を迎えたときに、そこでどう大人の側が判断するかが重要で、それによって若者たちにここまでは OK なんだっていう、メッセージを社会が作っていくことができると思いますね。

矢生：今聞いていて、「すき間」の視点が「誰にとってもあてはまるすき間の話」と、「もう少しケアが必要な人へのすき間の話」の2層で扱われているなと思いました。達平さん(両角)がしてくれたような、移民だったりとか差別的なことや障害がある中で、居場所がない人たち(青年も含め)に、ケアを含みながらユースワーカーが介入していく社会の「すき間」。それに対して、コトリエに来ている子どもの話は、今の日本のこども全般に当てはまる「すき間」。遊びに「すき間」がないとか時間に「すき間」がないっていう話だから、同じ「すき間」という言葉でも解釈が行き

来しているなと思いました。しんどい状況のほうの「すき間」の話だと、自分の友達の話ですが、不良の男の子がいて。僕はその子が苦手だったんですよ。だけど成人式から仲良しになった。大人になってから中学以降の話を聞いてみると彼は進学をしないで建設現場で働き始めていた。僕が再会したのが17.18歳のころ。高校生の頃バンドをやっていて、ライブハウスでちょっと会ったくらい。苦手だから。成人式になり、しっかりお酒を飲みましょうとなり話を聞いてみたら、中学時代の彼とは別人のようだった。なんでそんなに変わったんだい？と聞いたら、一曲の音楽なんですよ。働きながら音楽を聴いていたら、電流が走って、そこから音楽にのめりこんでいって、音楽を聴きながら仕事することによって良くなっていった。それが彼にとって突破口になっていて、今ではバーを経営している。この友人の場合、しんどい状況から抜けるための方法はバンドに出会ったからだった。ここにも「すき間」のヒントがあるのではと思います。

青山：さっき井口さんの話でも、みんな向けのユニバーサルアプローチと、特定の課題やニーズを持った人向けのターゲットアプローチをどう組み合わせるか、という問題がありますね。この問題は、ユースセンターにも公民館にもあるわけですけど、ここで大事にしたいのは、ユニバーサルなアプローチであることで、特定の課題やニーズの方も結果的に救われることがあるということです。ユニバーサルアプローチとターゲットアプローチがそれぞれ別のものでなくて、実は背中合わせになっていることが望ましいという面もあると思う。今のひでちゃんの友人のお話でも、音楽はユニバーサルなものですものね。スグキクで、「SNSが今の時代のすき間かもしれない」というコメントがありましたけど、SNSが救いになる人もいれば、音楽が救いになる人がいれば、MI グランプリが救いになる人がいれば、オールナイトニッポンが救いになる人もいるかもしれない。必ずしも、ユースワークに出会わなければ変わらないわけではない、ということも重要な視点ですね。スグキクでは「すき間は時間か、場所か」「すき間はありふれている」「すき間なんてどこにあるんだ。」「いや、あるよ。探せば。」など、社会の中の「すき間」をどうやって見つけられるかという話題が出ていますね。

## 学校教育との関係

青山：さっきからスグキクでは学校教育の話も出ていますね。今日は、学校外の話が中心になっていますけど、逆に、皆さんの立場から今の学校ってどう見えていますか。こうなれば良いなとか、学校と学校外がどう折り合っていけばいいのか、とか、「すき間」に関わって言えることはありますか。

井口：矢生さんに触発されて自分の話をするんですけど、僕はあまり学校の勉強は好きじゃなかったです。でも、なんとなくそこそこの成績取っておかないと就職大変そうだな。大学も出しておかないといけないなとか。よくあるモチベーションだった。そこでなぜ社会教育の仕事をやってみたいと思ったかという、主体的に学ぶということがこんな面白いのかと気づいてしまった。つまり、今までやりたくもない勉強をやってきた経験しかなくて、今日はあまりそういう場面を作れていないですが、

社会教育って、みんなで話し合いをしたりとか、今まで出会ったことのない当事者に出会ったりとか、そういう経験を通じて初めて、なんでだろうと考えたりとか、自分の意見言わなければいけない状況になるわけです。今でこそアクティブラーニングを学校で経験できる機会を増やそうとしていますけど、大学に入ってから、そういう面白さを知り、学びたいという意欲が沸き起こりました。それを仕事にするって何だろうなって考えながら、大学の社会教育主事課程をとっていた。きっと今日手伝ってくれている青山ゼミの学生もそういう感覚ってどっかで共有できるのではないかと思っています。つまり、学校っていうものも、自分の学び方次第というか、関わり方次第で、豊かになる可能性があるのではないか。学校外の方が、先生とか学習指導要領とか教科書とかがないため、もっと自由だと思うけど、でも、学校だって可能性がある気もする。スグキクのコメントの中で「学校の先生をやっているが、今まで自分がやって来たことは何だろう」というものがあつたけど、そんなことはきっとないはずなので、一緒に考えていきたいですね。

矢生：今日は学校ではないところの話をしているので、学校がネガティブに語られがちのところもあると思いますが、学校は学校で良いところがある。うちのコトリエに来ているほっちゃんという子が、学校とコトリエについて話しているときに、学校も面白いよってという感想を言っていたんです。最初、ストレスが溜まっているんだという話から、自分の面白いことについて話し出したんですけど、彼女が言うには、「学校の図工は、テーマとかいろいろ決まっているけど、その中で自分たちが作ったり、友達が作っているものも知れるから、面白いんだよね」と。逆に、コトリエは自分が好きなように作れて、いつまでも作ってて良いところが面白いと言っています。このほっちゃんの説明を聞いていると、先生に教わる面白さと、自分を活用する面白さが同居しているんだなと思います。対立していないんだなと。

青山：ここまで聞いてて思うことは、学校だと0で学校外が100みたいなことはなくて、むしろグラデーションがいっぱいあることが大事だということですね。さっき、スグキクで、ドラゴンボールのスカウターの議論があつて、戦闘能力だけで人を評価するものではないよって話があつたと思うんですけど、サッカーが上手い人、絵が上手い人、喧嘩が強い人、勉強ができる人とかそれぞれいても良いんだけど、人を見る時のものさしが一個ではなくて多様な、いわばみんながスカウター100個ぐらい持っているような、そんな多様なものさしがあれば良いのかなと思います

### 「すき間」の作り方

青山：もう残り時間があまりないのですが、最後に4人で、話したいことはありますか

井口：どれが良いかな。

両角：やはり、「すき間をどうやって作ったらよいか」じゃないですか。

青山：そうですね。最後に「すき間」の作り方の話をしていきましょうか。

両角：そもそも、すき間って作るものですか。

青山：以前、『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』<sup>\*</sup>という本があったんですけど、穴って何かが無い部分のことだから、それだけを扱うことってすごく難しいですよ。ドーナツを食べたら穴ごとなくなってしまうわけだから。あるのはドーナツだけで、穴自体は何もないわけだから、穴の方を何か実体のあるもののように扱えないわけ。余白や「すき間」っていうことも同じだと思うんです。つまり、「すき間」そのものを定義付けたり、それ自体を作ろうとするのではなくて、むしろ「すき間」を作ったり、奪ったりするドーナツのあり方の方を変えていくことに意味があるのではないかと、ということですね。今日のサブタイトルを「地域を〈教育〉で埋め尽くさないために」としたのも、地域を教育的にしようとする試みが「すき間」を小さくしていつているのではないかとという問題意識を持っているからです。「すき間」を作って「ここからは「すき間」です」という看板を立ててしまった時点で、そこは「すき間」ではなくなってしまうし、「すき間」を可視化しようとする自体が本末転倒なのかもしれません。よく、学校で配られるプリントの下の余白に「メモ」って書かれているでしょ。でも、本来余白は私がどう使うか決めるのであって、「メモ」なんていう看板をつけて意味のあるスペースにしようとする発想自体が、非常に息苦しい。だから、ドーナツで言えば穴よりも生地の部分ということになりますが、「すき間」でないもの、「すき間」を規定する側のあり方を問うことが、「すき間」を作るための第1歩なんだと思います。まあ、ドーナツのように穴の位置が明確なものよりも、発泡スチロールのように、形はあるんだけど、中がスカスカなものの方が、より実際のイメージに近いかもしれませんが。

井口：まさにそうですね。

矢生：「すき間」をつくるということの言い方を変えたときに、それぞれの豊かさのものさしを作るということなのかもしれないと思いました。例えば、タバコを吸わない人がタバコを吸う人を肯定的に受け入れられるのは、自分の中にも喫煙者のタバコに代わるなにか欠かせないなもの、趣味、趣向があるからじゃないですか。そう思うと、すき間を作るというよりも、それぞれの素敵な楽しいこと、うれしいことに



<sup>\*</sup> 大阪大学ショセキカプロジェクト編『ドーナツを穴だけ残して食べる方法 越境する学問一穴からのぞく大学講義』大阪大学出版会,2014.

敏感でいる。そうするとそれ以外にも寛容でいられる。結果的には、そこに「すき間」が生まれるのではないか。今日のコーヒーについてもそうですね。

両角：今日のスグキクのように、こうやってキャンパスを広げておけば、みんな発言するんですよね。「日本人って全然、手を挙げないし、静かだね。」とか、よく言われますけど、今日はこんなにコメントが出ているんですよ。これってすごくないですかって言うのはありますよね。

井口：そうですね。今日のようなシンポジウムで言えば、この4人の話を聞いていないといけないとか、飲み食いしてはいけないとか、そういう既存の価値観や既成概念みたいなものを少しずらすというか、そこにできた合間がここで言う「すき間」だったりしますよね。もっと大きく言うならば、学校とか社会とかを敵にして議論しがちであるけども、決してそんな大きな話ではなくて、既存のシステムによるコントロールが大きくなりすぎているものを少しずらす、そういう話なのかなと思います。今日は「すき間」について、学校外を中心に議論してきたけれど、本当はここを広くしていかなければならないですよね。だから、「すき間」を作るって言ったときには、最初からそのものを作るのではなく、既存の何かをずらすという話なのではないかと思いました。

青山：つまり「膝カクン」的なことですよね。

井口：それ、よく言うけど意味が伝わりにくいよね（笑）。

青山：え、そうなの？（笑）ふだんの授業でも、凝り固まった既存概念をずらしたり、崩したりする意味で「膝カクン」ってよく使うんだけど。

両角：そもそも、最近は「膝カクン」自体をあんまりやらないんじゃないですか。

青山：じゃあ「ストレッチ」でどうですか。

井口：それもちょっと違うな（笑）。

青山：というわけで、時間的にはあと数分になってしまいました。そもそも明確なゴールもないまま、「すき間」的に議論をしてきたので、何か結論があるわけではありませんが、ひとまずここで区切りたいと思います。ありがとうございました。

〈この時間にスグキクに投稿されたコメント〉 ※原文のまま掲載しています

288	コトリエの利用者(子ども)への周知方法は？口コミ？どうやって利用が浸透してきたのか、仕掛け方が気になります！
289	私は何のために大学で学ぶかが分からず、ただ漫然と日々を過ごしております。どのような大学生活を送っていましたか？どのような心構えで過ごせばいいか意見をお聞かせください。
290	スウェーデンを好きになったきっかけが知りたいです！
291	今帰っても良いのかな
292	コトリエのように、子供が自由に過ごして大人があまり介入しないスキマでは、問題が起きてしまったときの責任はだれがどうもつのですか？自由に過ごしていい空間での「責任」はどのように考えられているのか知りたいです。
293	レモネード美味しい☆
294	越谷は、浦和レッズ？大宮アルディージャ？
295	責任って反応能力のことなので、起きたことと、その文脈の中で考えればいいことなので、当然想定しうることだけ予防的に考えればいいんでないですか？
296	大宮アルディージャです

297	社会教育実践は楽しいが、公務員の既得権と生業として市民が事業を作り進めることが難しい現実を知ってほしい。
298	余暇って特別感あるけど本当は日常に余暇が必要なんだと思う
299	これからの世の中は、親世代との環境や価値観をぶち壊す必要がある。 地球規模での視野を持って欲しい。
300	ぶち壊そー
301	私ら老人世代もそう考えて、学生運動等してました。
302	余暇を特別にしちゃいけないだろうね。堂々と休めるように、堂々と自分の時間を大切にできるように。
303	うしろ寒い
304	あー帰らねばなのがかくやしい（；；） こころの隙間にいいものが入ってきた時間でした。 コーヒーもうまいぞ。 さんきゅー
305	私は、何か、多様性に関する活動をしたいのですが、まず何から始めたら良いですか？
306	川崎でたまれば、フリースペースえんを主宰されている西野博之さんが言っていました「けがと弁当は自分持ち」それで問題なく運営されてます。
307	今日本の教育など受け身的でカタイイメージがあります。そのせいか自由が苦手、隙間や沈黙が苦手な人もいます。そういう人にはどうアプローチするのが好ましいのでしょうか？
308	大学生の時に様々な地域活動に関わり始めましたが、社会人のいま、ライフワークにも仕事にも、とても生かされてます。 仕事を人生の中心に置くのではなく、 地域活動も仕事も趣味も遊びも同じように‘ジブン’をつくる大事な要素になっています。
309	ウエルネスライフ！
310	何か活動をしたいけど、 今まで活動したことないから何から始めたらいいのか分からないんだよなー 考えてることとかは割とあるんだけど
311	活動は、待っても、頼っても、始まらない↓ 自分が飛び込んで、辛いことも嫌なことも、感じながら人と繋ることが、活動の始まりです★
312	作られた「居場所」は、どうなって行くのだろうか。 役割を終えて地域に居場所が生まれた社会を目指すのか、今のように誰かが資源を集めて、誰かが注力して運営されていく姿のままなのか…
313	なるほど… 活動を現在なさってる方の、始めた原因と手段、経緯などを伺いたいです！
314	評価されないからこそ子どもも自由に活動出来るのかな
315	居場所って、あるがままでいられるところだから、人の期待を押し付けない事が、基本かな？
316	褒められる、評価されることが目的になっては、目指すところが違ってしまう
317	大人が期待しない場を作るのも必要なんだろうなあ。何も背負わず子供が 100%自分で考えられて、行動できる場が一つはあってもいいなと。
318	子供教室のコーディネーターです。 子どもと遊ぶことが目的じゃない。居場所もすき間も、自分や地域や学校に関わる人たちが集い楽しみ、結果として子どもが成長して、あーよかったね☆になるだけでいいんだと思う。
319	ほめられるものを作ろうとし始めてしまうのかもな…
320	ほめる…ほめない… 難しー。 温かい眼差しで見守るだけ、でいいかも。勉強も仕事も、何でも
321	「過剰に褒める」必要はないけれど、 ほんとにいい物やいいことには「いいね！」って伝えたいし、言われたいな

322	僕は褒められたいというより認められたいという気持ちが強いです
323	子どもの「満足」が学校だと「課題が終わること」になってる気がする。
324	褒めて欲しくて話しかけたのに、すかさねたら私は期待はずれで悲しいなあ
325	それは私も同意だなあ
326	「褒める」か「褒めないか」 どちらかが正解のような気がしてしまう問い方のマジックだと思いました。
327	確かに子どもが作ったものを大人たちが勝手に評価し賞をつけることは、賞を取れなかった子どもにとっては自己肯定感を下げってしまう要因になるよな
328	学校の「図工」についてはどう考えますか？
329	褒めはしないけど、共感はある、なるほど。でも難しそう
330	埼玉の学校は、賞が多いなあ。書きぞめ、硬筆展、図工なんかもたくさん。。。やっぱり技術指導重視になってしまう。
331	両角さん声のボリュームもう少しあげてほしい…
332	学校と、学校外とで補いあえばいい部分もあるのでは？
333	褒めるのではなく認める、承認する。
334	成長って何だろう？ 何のために成長する必要があるのか？
335	こういう話を聴くと、 今回のテーマとは少しズレるけど、どうしても、大人の働き方とかについて質問とかしたくなっちゃうな…
336	学校って先生の社会だからほかの価値観が受け入れられにくいイメージ
337	こどもたちには自由にやって欲しい気持ちがすごくあるけど、学校現場だとなんでも評価に繋がってしまうから、指導しないとイケなくなる。
338	ここに学校教育の先生がいると面白いなって思ってみたり
339	小学校はいつも褒められる、手本にされる児童が固定されがちだと思う。それは他の子たちの成長にとってはいかがなものか
340	学校は、じはつせいを殺しているという事？
341	スウェーデンに行って感じたこと。他人と比べないこと。
342	大人に褒められることを原動力としていると、褒められない時に途端に自信なくなる感じがするかも
343	スウェーデンの子どもは教育の場でも自己決定が求められると話されてましたが、もしもう勉強しないという選択を子どもがしたら自己決定した本人がすべての責任を負うのでしょうか？
344	褒められたいから頑張ると、やりたいから頑張ると、子どもの気持ちも行動も変わってくる もっとのびのびと自由にやってほしいのに
345	日本でも大学無償化とか言ってますよね
346	親には高校出て働いてから、進学を勧められたが、みんなが行くとかの不安の方が勝って、流れるままに進学していた
347	みんながそうするからってことで、みんなに合わせる人多いよね
348	自発性をなくす要因は、学校だけでなく家庭にもあるのではないか。 親や保護者が子どもに関わりすぎたり、ルールをひきすぎたり。
349	自由の鎖…だっけ？

350	場に居るひとたちの考えや意見が割れても、それを矯正するのではなくまずは受け止めるのが職員なのかな？人同士の「葛藤」からいろいろなものが生まれる。それも意味「すき間」??
351	安部公房の鞆かな
352	同級生がもう仕事してて、まだ学生の自分は肩身が狭いなって感じてます
353	成長は数字で測ったり評価したりできない。ドラゴンボールとおなじ！スカウターの数値で戦闘力見るような人は結局ホントのことは見逃すはず。みんなの力を貸してもらえば元気玉もできるし。
354	日本だと高校出ると進学か就職かの二者択一みたいなのとありません？
355	大学生になっていきなり放り出されてかなり戸惑った記憶がある
356	大学生の皆さんが、就職や将来のことを日々考えてると思うけど、仕事しながらだって主婦にだって、仕事や家庭のことなど考えつつ活動の楽しさずっと考えながら求めていることは変わらないよ。 人生100年…短いヒトもいれば長いヒトもいるし。 社会教育活動の実践をしている市民の多くは、自分の生き方を日々考えている。『まなび』続けるって何でもいいし。 地域活動に参加しているヒトって楽しさも辛さも解ってるから輝いてるよね。 てっぺいちゃんもその1人だし。
357	「はい、チーズ」 で撮るとみんなピース。 「ポーズ自由ー！」 って言うともみんな周り見る。 「ピース以外ー！」っていうと、みんな困ってました
358	確かに親が医者だから、教師だから私もその道に行くという子が多いよなあ。それは少なからず親に言われてることも影響しているんだと思う
359	元気玉=コミュニケーション力
360	税率鬼でしょ
361	学校教育で、本当に生きる力が身につけていないってことなんだよね。そのための指導要領の改定、教育改革
362	子どもの中には、「自由にやっていい」というのが辛い子がいる。何をやればいいのか分からない子もいる。だから、「テーマがある」ことで、やりたいことが決まって、そこからやりたいうようにできる子もいる。 だから自由がなんでもいってことでもないと思う
363	特に伝統芸能の世界ではその点について厳しい印象
364	内向的な人と活動についても考えたい コミュニケーション力が低いとどうしても生きづらいんだよね、それについてもう少し考えたい
365	多様性をより認識する必要がある。人それぞれ目指すところは異なるし、能力も異なる。それらを認める。
366	教室ではさすがに一年半は待てないな、、、
367	日本とスウェーデンでの差は国の豊かさの影響もあるのでしょうか？ それとも考え方の違い？
368	困ってる子が変化あるって周りに人がいるから？それともいなくても変わっていったのかな
369	どちらもありそう。日本は税金の使い方が下手
370	創造力って安心して居る場ってかなり大事ですね
371	日本とスウェーデン豊かさは経済的には全くかわらない。文化の違いかな？
372	確かに個性を生かすことが難しいのが、学校かもしれないね。
373	子どもというか生徒？に分からないように、誘導するのか。

374	自由って自分で決めて、自分で引き受けないといけないからしんどい時もある…
375	ひではファシリテーションという言葉を使わないけど、ファシリテーターだなあ。その括り自体がナンセンスかもだけど。
376	自由にやるってことを、大人というか先生が認めてあげることが必要なのかな
377	日本では個性を表に出すのが難しいと思う
378	今日話を聞いていると、学校の教員として自分がやっていることは、何なんだろうと考えてしまいました。
379	きっかけは、なんでもいいじゃん☆ プログラムはブラッシュアップは必要だけど、始めることと続けること。 理屈っぽくなるより、まずは自分が関わって始めることじゃん(^^)
380	いつも賞をとっている子は、逆に賞を取らないといけないという意識を持ち、周りの子は「あの子は絶対賞を取る」という意識がある。だから、どちらの子も、生きづらい環境になっている
381	やはりコーヒーは必須
382	青山先生落ち着いてください🙏
383	気管という隙間にマドレーヌが
384	喧嘩しないんだ……
385	ケンカがない 強制できだったり、同調を過度に求められない場だからかな
386	絵画の作品展？で賞を取ったことがある友達がいるけど、次の学年の時には、これは賞を取れないと思うから出さない！って言ってたな。この子は、賞を取ることが目標になってるってことか
387	そう考えると、自由って凶器じゃないですか？
388	自分のやりたいことを考えてから社会と折衷することって必要なんだよね。 それが出来ない、ただ挫折感を抱えてそれっきりになってしまう 社会の中で人間が生きていくことには変わらないから
389	高校で、個性って良いよね！好きに生きようよ！！からの、大学卒業しないと人生詰むよ！！ 手のひら返し食らった記憶
390	自立(自律)と調和のバランスが大事ですね。
391	子どものケンカはあるけど、仲裁することが指導のひとつだけど、お互いに個性のぶつかりあいでもあるから、ある程度放置したいよね。そこでわかり合う和の機会を踏まえ大人が先に入るのはダメ。見守るっ大切♪
392	スグキクにコメント書いてるけど、やっぱりいいねつくのか気にしちゃうなあ。認められるというか、同調じゃないけどみんなと同じっていうの欲しいんだなって思ってしまう。
393	自分のやりたいことをやっていて、他人と協働しないなら、ケンカになることもないのでは…
394	夏の風物詩
395	書きぞめで、のびのびと字を書いている作品が賞を取れるって言われてるけど、指導している時点で、そもそも手本がある時点でその子の個性とか「のびのび」が制限されてしまう気がする。
396	静いのが起きたときに間を取り持ってくれる人が、コミュニティとしていない社会になってるんだなあ
397	サイレンかな？
398	人の数だけ価値観や人生観が存在するわけだから、どうしても同調や許容できないことってあるよね
399	それが出来たらそこに集まってきたってことはスウェーデンでも若者たちの居場所がなかったのかな

400	日本でも、居場所が欲しくて児童館にくる非行の子がいますね。 どんな人でも自分が居ていいと思える場がもっと必要だと思います。
401	現在の日本の大学 隙間があるのか…？ 無いとは思わないが、 隙間ってどこだろ
402	ここ
403	自分のやりたいことの人が集まっても、やっぱり人それぞれ意見あるよ〜。(出会ってないだけだと思う) バンドなんかいい例じゃん(^^)音楽性の違い！って。どの学びや活動にもあるから協調的になれる自分や他人がいるかだと思う。
404	小学生の時倉庫の裏に秘密基地作って、たまり場にしてたな。今思えば子どもだけのすき間を作ってたんだと思う
405	今の若者たちのたまり場って、どこ？
406	ネット
407	隙間は、どこかにある、というより、自分たちでつくる、ものなのかもですね
408	Twitter じゃね
409	インスタもありそう
410	SNS
411	自分は大学はすき間が結構あった。でも、社会に出ると途端に隙間がなくなった(ような気がした)。そのギャップにめちゃくちゃ戸惑ったことがあります。
412	SNS か?!
413	いいねが承認
414	子どもの頃のように直に会って集まれる場が減ったなあ
415	居場所なんか、探せばいいじゃん！待っててもこないよ。勝手に来るのは、健康保険料や税金くらい。
416	今の小学生は更に集まれる場所がなくなってるんじゃないかな
417	ジャイアンいいヤツ
418	許せて仲良くなれるのがすごい
419	教員の人が言ってたけど、非行の子が教員に話を聞いてもらったときに、こんなに話を聞いてくれる教員初めてって言ってたな。
420	成人式のあとの同窓会で大学生より高卒で仕事してる人の方が大人だなんて思える人が何人もいた。そういう人に限って中学生の時はヤンチャな人が多いと思った。
421	居場所探しって難しいよ… 「探して行く、それだけのこと」と言われても、 今まで動いたことのない人にはほんと難しい。 動かないことを肯定するわけでは決してないけれど、それくらいに「見づらい」気がする。
422	「待っててもこないよ」って言える人は力のある人なんだろうなあ
423	すきまという「場所」はあっても、すきまという「時間」は少なくなってる。
424	すき間って、ありふれてる。
425	俺はまだナカジマ君許してないけどな
426	学校での評価がなくなる限り、子供の自由は制限されると思う。

427	ありふれてるけど、 中高では見えなかった。
428	すき間はあるけど気が付けないんじゃないかなあ
429	すき間が部活だった。
430	自分の時間軸変えるとすぐ、できる☆
431	中高でのすき間はサボるくらいしか思い付かなかった
432	学校の先生を目指している学生はいないのかな？
433	学校は集団を求めすぎてる
434	学校だからできることもある。。。はず。
435	集団だと管理しやすいからね
436	すき間って作ろうと思えば作れる、そこまで好きじゃない携帯のゲームしてる時間はすき間に 変えられるって岡田斗司夫が言った
437	家庭っていう軸も聞いてみたい。子どもにとって家庭の影響も強いと思う
438	学校では「すき間」があるとか必要って思わなかった。たぶん知らなかった。
439	主体形成は大事
440	主体的、対話的で深い学び
441	管理されるからすき間を見つけにくいのでは
442	勉強好きじゃなかったなあ〜。高校までは。5教科とか、副教科とか決められてるのが嫌だっ たなあ…。
443	「学校」でも、主体的に学んでる子はいらると思うんだけどなあ。
444	すき間をつくるには例えば勉強とか仕事とかで疲弊しきっていないことが前提条件になってる から作るのが難しいって言うてる人が多いのかも
445	偏った意見だけど、 感情的に言えば、私は 学校って正直大嫌いだったよ ただ勉強をやれって言われて、自分の意見を発信する機会もなかなかない。 …ちなみにこれが、学校批判だと思われると困る… これは、意見じゃなく、感想だから
446	自由は大事だけれど、 同じくらい協調性も大事だと思うので、集団社会だからこそ学べることもある気がします
447	協調性が大切ということを知るのは必要だけれど、協調を「取らなければならない」とは違うと 思う
448	自分は、先生に気づかれぬように悪さをするのが楽しかった。 でも今の子は、「あの子が悪いことしてました」って言うてくるので、指導しないとイケな くなる。子どもが子ども同士で自由を無くしてることってある気がする。
449	ひと昔まえに、公園デビューって流行ったけど、地域デビューの機会をもっと身近にあるよ。 学校だってその1つ。 自分の地元にごろごろあるよ。
450	協調性というよりは、人とうまく付き合う力を高めた方がいいんじゃないかなと思う 合わせるのが良いんじゃないかと、自分らしく生きつつどう社会の中で生きていくかが問題だ と思うから
451	本当に遊んでいい？の本当に遊ぶことができる場所ってことか
452	学校って高校までは効率的にワーカーを製造するシステム？
453	この講座が10月に行われていたら人教を選んでた……時すでに遅し

454	バランス
455	多様な学び場があったらいいな～
456	複数のものさし=多様性
457	人からのモノサシより、自分が自分を視るモノサシを育てよー
458	大学入試で測れるのは、やれと言われたことを、効率的にできる人を選別しているし、それに向けた教科学習を学校でやっている
459	多様性を認め合える社会に
460	何かの活動や場所があるから、そこに「すき間」が生まれるのでは？
461	無い是有る事によってしか定義できないって事です。
462	物事は見方によって変化するよね。
463	なるほどね 「指を描きたいのなら、 その周りの空間を描きなさい」的発想か…
464	白いカラスはいないって証明できないみたいな
465	スキマは寛容な心が生み出すもの。
466	すきまとそれ以外の境界ってあいまいじゃない？完璧な定義づけなんてできなくない？
467	それぞれに複数のものさしがあれば、「すき間」が生まれるのかも
468	楽しさを求める生き方を無駄にしてしまった時間が、すき間になってる…ワタシ。 だから、すき間を楽しみに変えて活(生)きたいなあ。
469	すき間=好き間
470	静かだけど、もちろん、それと考えごとをしてるかは別なんだよね
471	膝カクンはわかる
472	自分の考えを相手に分かりやすく文章化するの慣れてなくて難しいけど楽しい
473	「機会があれば」きっと色々やる人って多いんだろうな
474	お疲れ様でした、青山センセー☆ のじのじ君
475	デモの起こり方も変化してきたっていうしね
476	ありがとうございました！
477	様々な世代の人が意見を交わせるシンポジウム、とても楽しかった！ ありがとうございました。
478	ありがとうございましたー！ とても楽しかったです
479	新しい思考が得られたので良かった。
480	ありがとうございました！ 遅れてきたけど、また機会があれば参加したいです！

## [エンディング]

### ◇閉会のあいさつ

谷口 清（文教大学人間科学部）

本当に楽しいおしゃべりをありがとうございました。なんで私がここに立っているかという、地域連携フォーラム・シンポジウムを始めたのが私で、その責任をとれということで、研究科長に指名されてここに立っています。

2つ3つ感想があります。一つは、私は学生運動世代なので、今日のような議論というのは学生運動時代にたくさんやってきたということです。ただし、その時にはまだ発展というものがあると思っていた。だから、発展をしていくために、今の軛をどう断ち切るか、そういう議論をやってきたわけです。ただ、今日聞いていて感じたのは、まさしくグレタさんが「発展がずっと続くと思っているの？」と問うように、もうそういう時代ではない、ということです。「すき間」を作るというのは、すでに社会が有限なところに達しているからこそ、意図的に「すき間」を自分たちで作っていかなければいけないという、持続可能な社会をどうしたら作れるかという議論なんだということを感じました。我々老人世代は、すぐ立ち去りますけど、今日の話聞いていて、未来は捨てたもんじゃないというのが私の感想です。ちょうど昨日の夜、2人目孫が生まれたのですが（会場拍手）、安心して孫や皆さんに時代を託していけるかなということを感じつつ、これを感想とさせていただきます。本当にありがとうございました。



[参加者のみなさんからの感想] ※原文のまま記載しています

1	今回の話はすごく面白くて、特に4人でディスカッションしてるときがみんなの意見が聞けてよかったです。またスグキクの投稿もいつもの授業より活発でたくさんの方の考えをくれたので面白かったです。
2	すき間と言っても人や立場によって様々な意味があり、難しい面もありましたが、ゲストの方々の多様な経験や意見を聞けて参考になりました。自分自身が抱えている課題に対しても多くのヒントを得ることができ、有意義でした。ありがとうございました！
3	今日の講演会は全体的に興味をわく内容でした。まず、ひでちゃんのコトリエでのコンセプトのほめないというのは驚きでした。子どもたちは褒められるために作品づくりをするのではなく、自分たちの自由な発想を形にしてあくまで自己満足が出来ればいい（出来なくてもしょうがない）とのことであるほどだなあと感じました。思えば、私も小さい頃からピアノを習っていましたが、上手に弾けると周りの大人が喜んでくれるのが嬉しくてそのために習い事を続けていた感じがあり、人の視線を気にして生きてきたなあと感じます。また、スウェーデンの若者は自己決定を大事にしていて日本と比べて柔軟な生き方をしているなあと感じました。今の日本は制度も含めて窮屈にしている部分が多くて隙間がないなあと感じました。
4	とにかく楽しかったです！ 色々なお話がありましたが、褒めないという関わり方をされていることが、私にとっては目からウロコでした。子ども(大人もですが)は褒められて伸びるのは確かだと思います。でも、誰かに褒められたいからする努力には限界があるように感じられます。褒められることに価値を感じていると、誰かに褒められなかった時に自分を認められないんですよね。私自身はそうです(笑) でもこのフォーラムに参加して、誰かから貰う評価に怯えて縮こまっている自分ってもったいないなと思いました。何かが吹っ切れそうです。ありがとうございました！
5	とても楽しかったです。 登壇された方々のお話のもとより、参加者からの意見も聞けて(見れて)新鮮でした。答えを出すことより、みんなで考えて意見を交わすことに意味がある、と改めて感じました。ありがとうございました！
6	どんどん窮屈な社会になっていっているように感じます。それが最もな正論であるかのようにも語られている気がします。そこに問いを投げかける、本当は窮屈だと思っている思いを共有できる今回のようなシンポジウム、もっと開催してほしいと思います。 地域が教育的になっていくのは、子どもたちの環境をより良くしたい、その思いはきっと同じなんですよ。自分のすき間、社会のすき間、もう少し寛容な世の中になってほしいし、そのほんの一助になっていきたいと思います。
7	テーマの「地域を教育で埋め尽くさないために」に惹かれて参加しました。今はあまり感じなくなりましたが、私もかつて自由を辛く感じた経験を持っています。それは、自由と言いつつも、自由ではない(しきたりや空気など)が多かったからです。また、自分なりの楽しみ方を知りませんでした。どうしても、みんながこうしているから、こうすると褒められるから、に迎合してました。いまは、色々な人と出会う機会が増えてきているので、自然な自分であられる機会も増えました。一方で、フォーマルな場で活躍できると、自由な場での喜びよりも大きな達成感を得られたので、フォーマルな集いとくつろげる集いの両方に関われることが大切だと改めて思いました。
8	障害者の方と一緒にカフェを運営しているというのが印象に残りました。これからもっと、こういった活動が増えれば差別とかもなくなるんじゃないかと思いました
9	今回のフォーラムは、すきまがテーマというだけあってコーヒーやスグキクなどのすきまを垣間見ることができた。それらのすきまは、単に普通の講演会より自由になったというわけではなく、スマホを持っていない人の為に紙のアンケートも用意してあるなど、人のことを考えたすきまが提供されていたと思った。すきまとは、物事に対し考えを深めたり少し気をつけることでつくられるものかもしれないなと思った。後半も4人の方の話を聞きながら自分の中で新たな発見や疑問が次々に生まれ、参加型の意味がわかり参加して良かったと思った。
10	充実した時間でした。いろいろな視点からお話が聞けて面白かったです。また、こういうシンポジウムみたいなものを作ってほしいなと思っていました。
11	ありがとうございました
12	社会教育の分野で子供にとってよりよい学びとは何かを考えることは、学びの意義、ひいては何のために生きるかを考えることにも繋がると思った。

13	遊びと人間の授業のように、考えさせられる時間になった。特に、コトリエでの子どもと大人の関係については学校では出来ないもので良いなと思った。 すき間とは何だろうと講座の前から考えていたが、生活の中で生まれる心の豊かさであり、作るものではないのだなと感じた。
14	大変楽しかったです。
15	同じ分野の話でも様々な立場の人の話が聞けたので面白かった。カフェやディスカッション形式も面白かった。
16	たくさん考えさせられることが多く、参加して良かったです。私は教員志望なので、どうしても教育について考えてしまいましたが、子どもと関わる時に褒めるのではなく認める、というのがとても印象的で、実践していきたいなと思いました。コトリエのことをもっと詳しくお話を聞きたいと思いました。
17	子供に対する禁止事項や苦情の多い現代において、子どもにとってより良い「すき間」を考えている姿に、「もっとこういう人たちが世間で増えれば良いのに。」と感じた。今後子どもたちにとって「すき間」のある過ごしやすい社会になって欲しい。
18	自分は今、電車を待つ、電車に乗っている時などの隙間時間をSNSで潰しています。高校生以上は隙間をタブレットで、子どもはゲームで潰してしまうようになったと思います。技術の進化は喜ばしいことですが、あまりに技術が進みすぎて隙間が無いようにも思えます。そう考えていた中、このシンポジウムに参加して、今後の子どもや自分の時間の過ごし方や自主性について考える機会になりました。ありがとうございました。
19	授業とは違う視点からのすき間についての興味深いお話をたくさん聞くことができ、すき間について深く考える良い機会になった。 やはり、誰にでも居場所がある事はとても必要なことなのだと感じた。
20	『ほめない』というのは新しいと思いました。ほめられるにしても『上手な野菜を描けたね』よりも『今日の夕飯サラダ増やそうかな』みたいな方が私はいわれてうれしいと感じます。学校外の教育ばかりを取り上げていたけれど、学校には学校のよさがあるということにも気が付きました。友人のアイデアを聞けたり、話し合えたりできるのは学校ならではの雰囲気の良いシンポジウムいいなと思いました。 ありがとうございました。
21	話しが面白かったです。コトリエみたいな場所がもっと増えたら良いだろうなと思っていました。隙間ができる社会になって欲しいと思います。
22	楽しい話をありがとうございました。 価値観が多様になった昨今、教育の場がまだ柔軟な状態になっていないと思います。 すき間は作った瞬間から、すきまではなくなる。すきまでなくなった場所を活かせる人材に育てるのが教育だと思います。登壇者さまの発表したような環境が増えるといいな、と感じました。さまざまなお話、ありがとうございました！
23	今回のフォーラムを通して、色々な考えに触れることが出来た。作品に対して極端に褒めることはせずに共感するという話を聞いて、どんどん褒めなければいけないという訳ではないということを知った。これからの隙間について考える良い機会になった。
24	とっても、楽しい時間でした！ 御三方の個人のお話も含め、後半の討論というか話し合いも楽しかったです！ すきまや自由っていうものは、必要だけど強制的に与えられるものとは違うし、改めて難しいなと思いました。答えが出ないのは、少しムズムズしますがこれからいろんなことを学んでいろいろな視点から考えていきたいです！
25	まさに隙間をテーマにしたお話しでした。それぞれのゲストの方のあり方、考え方に触れられてとても心温まり、また、自分の場所でのできることを探していこうという思いが強くなりました。 また、こうした本質的な価値観、考えに触れられる場がこれから社会に出ていく学生にあることにとっても大きな価値があると思います。 一方的な講義形式ではなく、リアルタイムで意見も言える事もすごくいいシステムでした。ありがとうございました。
26	貴重な話をたくさんありがとうございました。今まで知らなかったことや興味のある話がたくさんありあつという間の3時間でした。すきま時間の作り方など自分なりに多く考えを持つことが出来たのでまた機会があればこのような会に参加して知識を増やしたいと思います。 ありがとうございました。

27	正解のない問題について考えていく中で様々な意見が聞けてとても参考になった。スウェーデンなどの海外では現在の日本より住みやすいところが挙げられていたので日本もまだまだ進化していけると思った。
28	ラフな感じが良かった。新しい意見を聞けてよかった。遊びもすき間も定義がなく、ゴールがないように感じだった。学校での学び、学校外の学び、どちらも良い具合に絡めば良いと思う。すき間は与えられたら逆に自分は困る。すき間は突然くるものであるのかなあと感じた。すき間は作るより、自然にできるもの。
29	私は高校を卒業してから3年弱、間を空けてから大学に入学しました。正直、その3年間は黒歴史で恥ずかしいことだと思っていたのですが、今回のシンポジウムを受けて、あの期間は私にとって必要な「すき間」だったのかなと思うことができました。ありがとうございました！
30	すき間と、本体になる部分、自由と形式的な、言ってしまえば不自由な部分、それらのバランスが、両立が本当に難しい問題だと感じた。
31	誰かがコメントの方でも言っていたのですが、私は機会があれば行動を起こすタイプなので、今回のこういったイベントはとても刺激的で本当に楽しかったです！いつも使わない脳の辺りをたくさん使って疲れはしたのですが、その疲れさえも心地よいです。機会を設けてくださってありがとうございました。
32	お話を聞くことが出来て、興味深かったです。次もこのような会がありましたら、是非参加してみたいです。
33	普段はなかなかじっくり考えられない、すき間について考えることができよかったです。御三方の貴重なお話、聞けてよかったです。思い切って参加してよかったですと思います。わたしは学校の教員なので、学校教育の可能性について、これからの在るべき？姿についても一緒に考える機会があったら嬉しいなあとと思います。またぜひ開催してください。
34	様々な環境で活動している方々がそれぞれのすき間について話しているのを効いて新たな考え方を知ったり視野が広がりました。個人的に印象に残ったのはコトリエの話で子どもたちが自由に好きなように何か創作できる環境があるのは素敵だなと思いました。
35	授業とはちがくて、いろいろな職業柄の人の話をたくさん聞くことが出来て貴重な経験になった。
36	途中参加でしたが、人数の多さにビックリ。特に学生が多くてビックリ。楽しかったです。こういう話、小学生、中学生、高校生交えてやってみたい！と思いました。
37	普段考えないことを考えられて幸せでした。ずっと同じ場所にいると、違う見方や考え方ができなくなってしまう。だから、このような場所に、学生でなくても参加できることがとても良かったです。ありがとうございました。みんなの考えも見られて本当に良かったです。
38	隙間は見えないもので、隙間では無い物があることでしか証明できないという表現がピンと来ました。ありがとうございました。
39	チャット形式でとても良かったです。自由に発言できる感じがとても気持ち良かったです。これが日本人の特徴なのかなとも思いましたが…。
40	とても刺激的な内容でした。
41	4人の方、そしてスグキクで色んな方のコメントから色々な視点があることを得られて良かったです。お疲れ様でした。
42	非常に楽しかったです。余り、隙間、あいだ、とか色々考えるじかんになりました。
43	ゴミ箱が見当たらなかった
44	色々なことをと考えることができました！
45	紙に書きました。
46	高校に模擬授業に行く際、「高校生の居場所」というのを書いてもらっています。そのうち文章にまとめようと思っていますが、今日のお話はいろいろ参考になりました。青山先生の議論のさばき方感服しました。どうしても教育学部が目立つ大学ですが、いろいろな意味で「教育」でうめつくせないことは大切ですね。

47	多様なものさしで判断する余裕が社会やコミュニティに必要なと思いました。その中で、自分が心から好きだと思える物を求めるプロセスがすきまにつながる気がしました。が、そもそもすき間を定義すること自体ナンセンスかもと。面白かったです。
48	教育学部にて勉強しています。地域と子どもについての論文を書きたくて何かヒントになりそうと思い参加させていただきました。教育の現場だけを見ているだけじゃわからない子どもの気持ち、居場所、自分のことまでも考えることができたいい機会でした。子どものことばかりに目を向けていたけれど、大人の気持ちや生活スタイル、考え方がかなり影響されていて見逃しちゃいけないなとわかりました。ありがとうございました。
49	こういうフォーラムをつまらないと感じる人っているのかな？と思いました。みんな主体的に学ぶことが（井口さんのお話にあったように）こんなに楽しいのか！と気づければもっとこういう場でたくさん考えて、充実感もって学び生きていくことができるのに…もっといろいろな人がこういう場に参加してきてくれたら日本もっとよくなりますよね！強くそう思うんです。
50	現代の社会において子どもに対する「すき間」を大人が考えるのは難しいと感じた。直近のニュースでいえば香川県が子どもに対してゲームやインターネットを制限する条例を制定しようとしている。これが制定してしまったら、子どもは、公園でもきびしい禁止事項があり、家の前で遊べば苦情がくる中でどこで遊べばいいのか、「すき間」を作ればいいのかと疑問に思った。そのような中で、アトリエや青年室などのこどもの「すき間」を作るための、居場所を用意してあげるのはとても良いことだと感じた。こうした動きは今後全国に広がっていけば良いと思った。
51	色々な話が聞けました。子どもはやっぱりすごいなと思いました。私よりまともな考えを持っています。すき間はつくるものではない。自然とできてくる？やっぱり難しいなと思いました。聞けば聞くほど難しいと感じることが多かったけど、なるほど、そういう考えもあるのかと新しい発見があるからおもしろかったです！今日、この講義を聞いて良かったです！！
52	いつもの遊びと人間の授業が密度濃くなった感じでした。あつというまの3時間で充実していたなあと思いました。人生、好きな事ばかりやれるわけではないし、自分の思い通りにならないほうが多いし、受け入れなければならないこともある。それをやった上で、空いた時間を上手く利用し、楽しめたらいいんじゃないかなって思います。今日の講義でいろいろ考えたけれど、なんか生きていく間に解決しそうでないので、とりあえず、時間を有効活用して、死ぬときに「楽しかった～！」って思いたいです。😊
53	子どもを変えるよりも保護者を変えていくことで、今よりも大人力の弱い背景を子どもに与えられるのではないだろうかという話にとっても共感した。学校や幼稚園で改修工事が増加したという話を聞いて、子どもの遊びの減少が遊び道具の変化等にも関係しているのではと思った。
54	コミュニケーション能力の話の際に、コミュニケーションが100の人に10の人においつくのではなくて、100の人が10の人においつき、周りから10の人をサポートするというのはとても納得できました。ほめないというのは謎だと思いました。話をきいているうちにそういう考え方もあるのかと思いました。ほめるわけではないけど共感する。これは子どもからみたらあまり気にならないものだと思いますが、こちら側の目的としてはそこが大事だと思いました。
55	<ul style="list-style-type: none"> <li>・矢生さんの話の中であった子どもの想像が乏しいということ。「すきま」がないと考えるのは、まさに遊びと人間だと感じた。今時の大人が作った遊び（ゲームやおモチャ）が完成されすぎていてのために「すきま」がない。工夫や妄想の余地がないのだなと。</li> <li>・井口さんの話は自分にとって興味の塊だった。今公務員を考えているが、そのビジョン？こんな事をしたいっていうイメージがまさに井口さんの仕事だった。</li> <li>・すきまの作り方。ドーナツでいうなら、ドーナツを作ればすきまを作れるのでは？無→有ではなく、有を作ってその中に無が生まれる的な。</li> </ul>
56	今回のフォーラムに参加して「すき間」の大切さを感じました。日本という国自体、すき間が少なく、息苦しいなと気づきました。家で勉強に集中できなかつたり、つかれすぎてゴロゴロしてしまうと後悔することがあります。でもすき間（ゴロゴロする）ということ自体にも意味があるし、そういう時間があってもいいのかなと思いました。スウェーデンはゆとりがあり、自分のやりたいことができる環境があることで若者の1人1人の意識の高さにつながっているのだなと思いました。私は来月学校のプログラムである北欧研修に行くのでこのようなすき間について現地の方の話等から学んで来たいと思います。
57	すごくおもしろかったです。子ども、海外など異なる視点でいろいろ考えるいい機会になったと思う。複数のものさしで考えるって大事だなと思いました。
58	上の照明ははんぶんくらい消してもいいと思います。考えさせられることも多くためになりました。本日もお世話になりました。

59	「教育で埋めつくさない」というテーマがまず面白いと思いました。あえて「やらない、関与しない」という選択も必要なのだと分かりました。すき間を埋め勤勉に頑張るコトが良し、とされるイデオロギーも原因なのかとも思います。埋めるコトで見えなくなったモノを取り戻す取り組みが必要ですね。非常に興味深かったです。ありがとうございました。
60	「自由」ってとても難しいものなんだなと思いました。突然選択肢や時間ができると私もとまどってしまいます。今までの学校での勉強だけではカバーできないものがこれからとても多いと思います。今日のシンポジウムでもあったように自分の意思や決定がとても大切だと思ひ、それに加え、自分だけでなく他者の考えもしっかり尊重できれば良いのではないかと思います（同調ではなく…）。
61	矢生さんの子どもをほめないという考え方に驚きました。子どもはほめてのばす考え方があるなかで、どうしてほめないのかなと疑問に思いました。第2部でほめはしないけど、共感はずると言っていてなるほどと思いました。でも、私自身は、ほめられないよりはほめてほしいと思ってしまうので、難しいなと思いました。今日のシンポジウムで様々な場面で活躍している人たちの話を聞いて新しい考え方や今までとは違う視点からものごとをみられるような気がしました！
62	ラフな講演会で、全然眠たくならなかつたし、むしろ前のめりになって楽しく参加することが出来ました。「すき間」の作り方や、捉え方の色々な意見や考えを聞くことが出来て、とても勉強になりました。
63	「すき間」というテーマで自分の見方・考えがとても広がりました。仕事を始めてから、とにかく世話しなく時間が過ぎていて、本当に自分は幸せなのかと感ずることもあります。ただ、その中に好きなこと、やりたいことができていることを忙しさの中の「すき間」だと思いました。また機会があれば参加したいです！青山先生と久しぶりに会えてうれしかったです！
64	18歳までだと人生経験が少ない中で、これからの約40年間の仕事を決定するための足がかりになるような専門学校や大学進学を決めるのは自由がなさすぎると思う。しかし、世間が思うように進学や就職を決めなければ（浪人を除き）、異端者のように扱われる形式ばった風潮が心の底から染みついている。そもそもスタート地点から何もかも異っている。だからこそ、日本にも良いところはあると思うが、「すき間」を考へるとき、その日本ならではの風潮がそれを阻害しているように私は考へる。
65	“子ども参画型社会創造支援事業”というものを担当しています。「～地域を教育で埋め尽くさないために～」この副題にひかれ、参加させていただきました。“これは学校がやること”“そこまでこちら（社会教育）でやらなくても…”ではなく、子どもをとりまく人たちで（子どもも含めて）もっともっと話し合いが必要だと感ずました。（テーマは、集ったメンバーで決める。ゆるやかに…）刺激と参考になることたくさん！のひとときでした。ありがとうございました。
66	楽しく考へる、共感する、生きる幅が広がる対話をありがとうございました。3人のspeakersと青山先生の自由度の高い発言、そしてすきを与えずどんどん意見が書きこまれる参加の仕方一どれも発見でした。自分自身が固くよろいをつけているなと思わされました。生きることが苦しい人とも一緒に、同時代を共に生きている事実を、少しでもやわらかく動かしていきたいものだと思います。
67	答へにたどりつくためではない、なにかを一方的に“教える”ためでない場のありかたが心地よく、自分の思い・考へと対話する「すき間」があるイベントだなと感ずました。ゆるやかな空感の中で、自由やすきまについて、想いをめぐらせる貴重な時間をいただいたこと、感謝しています。
68	とても楽しかったです。この様なシンポジウムがもっと開かれたらなと思います。学校現場で働いている身として、今日の議論を学校でどう生かせるかずっと考へていました。1つ思うのは、以前は家庭教育、社会教育、学校教育がバランスをとれていたのかと。近頃は、資本主義のもとそのバランスがくずれ、学校教育に集中してしまい、我々教員は苦しんでいるのかと思います。若者にとらわれず、今の日本は全ての世代に「すき間」が必要だと感ずます。
69	すばらしい会でした!!!すき間多めにとります……良い時代のために、世の中捨てたもんじやないと思つて…（信じて…）
70	お話を聞きながら、自分にできることは何だろう？とずっと考へていました。現在教育困難校といわれる県立高校で相談員をしています。無目的なたまり場、学校にも家庭にも居場所のない子どもたちが居られる場所づくりができたらいいなと……それにはどう動いて行けばいいかまだわかりませんが、大きな力をいただいた時間でした。ありがとうございました。

---

文教大学大学院人間科学研究科 主催  
第7回地域連携フォーラム・シンポジウム 報告書

子ども・若者が育つ「すき間」の作り方  
～地域を〈教育〉で埋め尽くさないために～

発行 文教大学大学院人間科学研究科  
印刷 よしみ工産株式会社  
編集 青山鉄兵  
編集協力 朝倉翔也・伊藤智和・方喰笑美李・山中朋子  
発行日 2020年3月

---